

二五 田圃を求めんことを夫にすゝめたりしがつひにアクサ驢馬より下りければカレブこれは何事ぞやといふに 答へけるはわれに恵賜をあたへよなんぢ南の地をわれにあたへたればねがはくは源泉をもわれにあたへよとこゝにおいてカレブ上の源泉と下の源泉とをこれにあたふ

二六 モーセの外舅ケニの子孫ユダの子孫と偕に棕櫚の邑よりアラドの南なるユダの野にのぼり來りて民のうち二七 に住居せり 茲にユダその兄弟シメオンとともに往きてゼバテに住るカナン人を撃ちて盡くこれを滅ぼせり二八 是をもてその邑の名をホルマと呼ぶ ユダまたガザと其の境アシケロンとその境およびエクロンとその境を取り 二九 エホバ、ユダとともに在したればかれつひに山地を手に入れたりしが谷に住る民は鐵の戰車をもち三〇 たるが故にこれを逐出すこと能はざりき 衆モーセのかつていひし如くヘブロンをカレブに與ふカレブその二一 ところよりアナクの三人の子をおひ出せり ベニヤミンの子孫はエルサレムに住るエブス人を追出さざりしかばエブス人は今日に至るまでベニヤミンの子孫とともにエルサレムに住ふ

二三 茲にヨセフの族またベテルをさして攻め上るエホバこれと偕に在しき ヨセフの族すなはちベテルを二四 窺察しむ(此邑の舊の名はルズなり) その間者邑より人の出來るを見てこれにいひけるは請ふわれらに邑の入口二五 を示せさらば汝に恩慈を施さんと 彼邑の入口を示したればすなはち刃をもて邑を撃てり然ど彼の人と其家族二六 をばみな縦ち遣りぬ その人へテ人の地にゆき邑を建てルズと名けたり今日にいたるまでこれを其名となす二七 マナセはベテシヤンとその村里の民タアナクとその村里の民ドルとその村里の民イブレアムとその村里二八 の民メギドンとその村里の民を逐ひ出さざりきカナン人はなほその地に住ひ居る イスラエルはその強なりし

イ創三三・一一 五五 耶三五・二 ホ民一〇・三二 四 七 三六 舊一四九、 七 舊一五・六三、 一八 七・二士
口士四・一一、 一七 傳 八 申三四・三 へ士一・三 七 舊一七・一六、 一八 一三、 一五・二三、 一八・二
前二五・六 代上二 二民二一・一 卜民二一・三 舊一九 里士一・二 王下一八 ル民一四・二四 申一 一四 七士二・一九 ヨ創二八・一九

タ書二・二二、一四
 レ書二七・二二、一二、一三
 ソ書一六・一〇 王ト
 ナ書一九・二四、三〇
 ラ書一九・三八
 ヲ書一九・四二
 ノ民三四・四 書一五
 ク創一七・七
 ヤ申七・二
 マ申二・二三
 ケ士二・二〇 附一〇
 六・三四

ときカナン人をして貢を納れしめたりしがこれを全く追ひいだすことは爲ざりき

エフライムはゲゼルに住るカナン人を逐ひいださざりきカナン人はゲゼルにおいてかれらのうちに住み居たり

ゼブルンはまたキテロンの民およびナハラルの民を逐ひいださざりきカナン人かれらのうちに住みて貢を

をさむるものとなりぬ

アセルはアツコの民およびシドン、アヘラブ、アクジブ、ヘルバ、アピク、レホブの民を逐ひ出さざりき

アセル人は其地の民なるカナン人のうちに住み居たりそはこれを逐ひ出さざりしゆゑなり

ナフタリはベテシメシの民およびベテアナテの民を逐ひ出さずその地の民なるカナン人のうちに住み居たり

ベテシメシとベテアナテの民はつひにかれらに貢を納むるものとなりぬ

アモリ人ダンの子孫を山におひこみ谷に下ることを得させざりき アモリ人はなほヘレス山アヤロン、

シヤラビムに住ひ居りしがヨセフの家の手力勝りたれば終に貢を納むるものとなりぬ アモリ人の界はアクラ

ビムの阪よりセラを経て上に至れり

第二章

エホバの使者ギルガルよりボキムに上りていひけるは我汝等をエジプトより上らしめわが汝らの先祖に誓ひたる地に携へ來れりまた我いひけらくわれ汝らと締べる契約を絶てやぶることあらじ

汝らはこの國の民と契約を締ぶべからずかれらの祭壇を毀つべしとしかるに汝らはわが聲に従はざりき汝ら

如何なれば斯ることをなせしや 我またいひけらくわれ汝らの前より彼らを追ふべからずかれら反て汝等の肋を

四 刺す荆棘いばらとならんまた彼らの神々は汝らの害わざはひとなるべし エホバの使つかひこれらの言をイスラエルのすべての子孫

五 に語しかば民聲をあげて哭ぬ 故に其所の名をボキム（哭者）と呼ぶかれら彼所にてエホバに祭物を獻げたり

六 ヨシユア民を去しめたればイスラエルの子孫おのおのその領地におもむきて地を獲たり ヨシユアの世

七 七 ありし間またヨシユアより後に生きのこりたる長老等の世にありしあひだ民はエホバに事へたりこの長老等は

八 エホバのかつてイスラエルのために成したまひし諸の大なる行爲を見しものなり エホバの僕ヌンの子ヨシユ

九 ア百十歳にて死り 衆人エフライムの山のテムナテヘレスにあるかれの産業の地においてガアシ山の北にこれ

一〇 を葬れり かくてまたその時代のことごとくその先祖のもとにあつめられその後に至りて他の時代おこり

しが是はエホバを識しずまたそのイスラエルのために爲したまひし行爲をも識しざりき

二二 イスラエルの子孫エホバのまへに悪きことを作してバアリムにつかへ かつてエジプトの地よりかれら

を出したまひしその先祖の神エホバを棄て、他の神すなはちその四周なる國民の神にしたがひ之に跪ひざまづきてエホ

二四 二四 バの怒を惹起せり 即ちかれらエホバをすて、バアルとアシタロテに事へたれば エホバはげしくイスラエ

ルを怒りたまひ掠むるものの手にわたして之を掠めしめかつ四周なるもろもろの敵の手にこれを賣たまひしかば

二五 二五 かれらふたゝびその敵の前に立つことを得ざりき かれらいつこに往くもエホバの手これに災をなしぬ是はエ

ホバのいひたまひしごとくエホバのこれに誓ひたまひしごとくにおいてかれら悩むこと甚だしかりしが

二六 二六 エホバ士師を立てたまひたればかれらこれを掠むるものの手よりすくひ出したり 然るにかれらその

イ書二三・一三 二書二二・六、二四・ 三〇 加四・八 撒後一、ワ士三・七、一〇・六 太士三・八、四・二 詩 二六・六、申二八・
口士三・六 二八 八多一・一六 詩一〇六・三六 四四・一二 賽五〇 士三・九、一〇、一五
ハ出二三・二三、三四 ホ書二四・三一 出五・二 母前二、ヌ申三一・一六 カ士三・八 詩一〇六 母前一二・二一 徒
・一二 申七・一六 へ書二四・二九 一二 代上二八・九 申六・二四 四〇、四一、四二 利二六・三七 書七 一三・二〇
詩一〇六・三六 ト書一九・五〇、二四 耶九・三、二二、二六 ラ出二〇・五 ヨ王下二七・二〇 二二、二三

出三四・一五、一六　ラ創六・六　申三二・一、四・一、　并書二三・一六
利一七七　三六　詩一〇六・四　八・三三　ノ書二三・一三
ナ書一・五　四、四五　ウ士二・一四　オ士三・一、四　ヤ士二・二一、二二　マ書一三・三
ケ士二・二二　フ詩一〇六・三五　コ出三四・一六　申七

士師にもしたがはず反りて他の神を慕て之と淫をおこなひ之に跪き先祖がエホバの命令に従がひて歩みたると

一八　ころの道を傾に離れ去りてその如くには行はざりき　一八　かれらのためにエホバ士師を立てたまひし時に方りて

はエホバつねにその士師とともに在しその士師の世に在る間はエホバかれらを敵の手よりすくひ出したまへり

此はかれらおのれを虐げくるしむるものありしを呻きかなしめるによりてエホバ之を哀れみたまひたればなり

一九　されどその士師の死のちまた戻きて先祖よりも甚だしく邪曲を行ひ他の神にしたがひてこれに事へ之に

二〇　跪きておのれの行爲を息めずその頑固なる路を離れざりき　二〇　是をもてエホバはげしくイスラエルをいかりて

二一　いひたまはく此民はわがかつてその列祖に命じたる契約を犯し吾聲に従がはざるがゆゑに　二一　我もまたいまより

二二　はヨシユアがその死しときに存しおけるいづれの國民をもかれらのまへより逐ひはらはざるべし　二二　此は我イス

二三　ラエルがその先祖の守りしごとくエホバの道を守りてこれに歩むやいなやを試みんがためなりと　二三　エホバは

これらの國民を逐はらふことを速にせずして之を遺しおきてヨシユアの手に付したまはざりしなり

第三章

一　エホバが凡てカナンの諸の戦争を知ざるイスラエルの者どもをこゝろみんとて遺しおきたまへる
二　國民は左のごとし　二　「こはたゞイスラエルの代々の子孫特にいまだ戦争を知ざるものにこれををし

三　へ知らしめんがためなり」　即ちペリシテ人の五人の伯すべてのカナン人シドン人およびレバノン山に住みて

四　バアルヘルモンの山よりハマテに入るところまでを占めたるヒビ人はなり　四　これらをもてイスラエルをこゝろみ

五　かれらがエホバのモーセによりてその先祖に命じたまひし命令に遵ふや否を知可りしなり　五　イスラエルの子孫

六　はカナン人ヘテ人アモリ人　六　ペリジ人ヒビ人エブス人のうちに住みかれらの女を妻に娶りまたおのれの女を

かれらの子に與へかつかれらの神に事へたり

七 斯くイスラエルの子孫エホバのまへに惡をおこなひ己れの神なるエホバをわすれてバアリムおよびアシラ

八 に事へたり 是においてエホバはげしくイスラエルを怒りてこれをメソボタミヤの王クシヤンリシヤタイムの

九 手に賣り付したまひしかばイスラエルの子孫はおよそ八年のあひだクシヤンリシヤタイムにつかへたり 茲に

一〇 イスラエルの子孫エホバによばはりしかばエホバはイスラエルの子孫の爲にひとりの救者を起して之を救はしめ

給ふすなはちカレブの舍弟ケナズの子オテニエル是なり 一〇 エホバの靈オテニエルにのぞみたれば彼イスラエル

を治め戦ひに出づエホバ、メソボタミヤの王クシヤンリシヤタイムをその手に付したまひたればオテニエルの手

二 クシヤンリシヤタイムに勝ことを得たり かくて國は四十年のあひだ太平なりきケナズの子オテニエルつひに

死に 死に

三 イスラエルの子孫復エホバの眼のまへに惡をおこなふエホバかれらがエホバのまへに惡をおこなふにより

二 三 てモアブの王エグロンをつよくなしてイスラエルに敵せしめたまへり 一三 エグロンすなはちアンモンおよびアマ

二 四 レクの子孫を招き聚め往きてイスラエルを撃ち機欄の邑を取り 一四 こゝにおいてイスラエルの子孫は十八年のあ

ひだモアブの王エグロンに事へたりしが 一五

二 五 イスラエルの子孫エホバに呼はりけるとときエホバかれらの爲に一個の救者を起したまふすなはちベニヤミ

二 六 ン人ゲラの子なる左手利捷のエホデ是なりイスラエルの子孫かれを以てモアブの王エグロンに餽物せり 一六

二 七 デ長一キュビトなる兩刃の劍を作らせこれを衣のしたに右の股のあたりにおび 一七 餽物を齎してモアブの王エグ

イ士二・二一 一六・二二 士六・ホ士二・一四 母前二・一〇 尼 一〇七・一三、一九 リ民二七・一八 士六 六・一九 母前二・一
ロ士二・二三 二五 へ士三・一五、四・三、 九・二七 詩二二・ト士二・二六 三・四、一一・二九、 六 代下一五・一 士五・一四
ハ出三四・一三 申 二拾三・七 六・七、一〇・一〇 五、一〇六・四四、 士一・二三 一三・二五、 一四、 又士二・一九 士一・一六

一八 ロンのもとに詣るエグロンは甚だ肥たる人なりき 一八 さて餽物を獻ぐることをはりしかば彼餽物を負ひ來りし

一九 ものをかへし去らしめ 一九 自らはギルガルの傍なる石像の在る所より引き回していひけるは王よ我爾に告ぐべき

二〇 密事ありと王人拂を命じたればその旁に立つものみな出で去りぬ 二〇 エホデすなはち王のところに入來れり時に

王はひとり上なる涼殿に坐し居たりしがエホデ我神の命に由りて爾に傳ふべきことありといひければ王すなはち

二二 座より起に 二二 エホデ左の手を出し右の股より劍を取りてその腹を刺せり 二三 柄もまた刃とともに入りたりしが

二三 脂肉刃を塞ぎて之を腹より抜き出すことあたはずその鋒銑うしろに出づ 二三 エホデすなはち廊をとほりてその後

に樓の戸を閉てこれを鎖せり 二四 その出でしのち王の僕來りて樓の戸の鎖したるを見いひけるは王はかならず涼殿の間に足を蔽ひ居るなら

二四 二五 僕ども耻るまでに侯居たれど王樓の戸をひらかざれば鑰をとりて之を開き見るにその君は地に仆れて

二五 死をる 二六 エホデは彼等の猶豫ふ間に逃れて石像の在るところを過りセイラテに遁げゆけり 二七 かれ既に至りエフラ

二六 二七 イムの山に鑢を吹きければイスラエルの子孫これとともに山より下るエホデこれを導けり 二八 かれ人衆にいひけ

二七 二八 るは我に續て來れエホバ汝等の敵モアブ人を汝等の手に付したまふなりことにおいてかれらエホデにしたがひて

二八 二九 下りモアブにおもむくところのヨルダンの津を取りて一人も渡ることを允さざりき 二九 そのとき彼らモアブ人お

二九 三〇 よそ一萬人を殺せり是皆肥太たる勇士なりそのうち一人も脱れたるものなし 三〇 モアブはその日イスラエルの手

三〇 三〇 に服せり而して國は八十年の間太平なりき

タ出一四・四
レ士二・二四
ソ士五・一八

ツ出一一・八
二〇・一〇
ネ士一・一六

王上 ナ民一〇・二九
ラ士四・六

ム申九・三
二四 詩六八・七
賽五二・一二

ウ詩八三・九、一〇 卷ノ士五・二六
一〇・一〇
井士五・二五

イムの橡かしの樹きのかたはらにその天幕てんまくを張り居ゐたり

二三

二三 ひとく

衆アビノアムの子バラクがタボル山やまに上のぼるよしをシセラに告つげたりければ

二三

シセラそのすべての戦いくさ

車くるますなはち鐵てつの戦車いくさくるま九百輛りやうおよびおのれとともに在あるすべての民たみを異邦人ことくにびとのハロセテよりキシオン河がはに招まねき集つど

二四

二四

へたり デボラ、バラクにいひけるは起たてよ是これエホバがシセラを汝なんぢの手に付ついたまふ日ひなりエホバ汝なんぢに先さきき立たち

二五

二五

て出いでたまひしにあらずやとバラクすなはち一萬人まんにんをしたがへてタボル山やまより下くだる エホバ刃やいばをもてシセラと

その諸すべての戦車いくさくるまおよびその全軍ぜんぐんをバラクの前に打敗うちやぶりたまひたればシセラ戦車いくさくるまより飛とび下おり徒歩ちほになりて遁のがれ走はし

二六

二六

れり バラク戦車いくさくるまと軍勢ぐんせいとを追おひ撃うて異邦人ことくにびとのハロセテに至いたりシセラの軍勢ぐんせいは悉ことごとくく刃やいばにたふれて残のこれる

もの一人ひとりもなかりしが

二七

二七

シセラは徒歩ちほにて奔はしりケニ人ひとへベルの妻つまヤエルの天幕てんまくに來きたり是こはハゾルの王わうヤビンとケニ人ひとへベルの家いへ

二八

二八

とは互たがひに睦むつじかりしゆゑなり ヤエル出いで來きたりてシセラを迎むかへ之これにいひけるは來きたれ我主わがしゅよ入いり來きたれ怖おそるゝなか

二九

二九

れとシセラその天幕てんまくに入いたればヤエル被ふをもてこれを覆おほへり シセラ之これにいひけるはねがはくは少すこしの水みづをわ

三〇

三〇

れに飲のませよ我渴われかわけりとヤエルすなはち乳囊ちぶくろを啓ひらきて之これに飲のませまた之これを覆おほへり シセラまた之これにいひけるは

三一

三一

天幕てんまくの門邊かどべに立たちて居をれもし人來ひときたり汝なんぢにとふて誰たれかこゝに居をるやといはゞ否いなと答こたふべしと 彼疲かれつかれて熟睡うまいせしか

三二

三二

ばへベルの妻つまヤエル天幕てんまくの釘子くぎを取り手てに鎚つちを携たづへてそのかたはらに忍しのび寄より鬚げんのあたりに釘子くぎをうちこみて地ち

三三

三三

に刺さし通とほしたればシセラすなはち死したり バラク、シセラを追おひ來きたりしときヤエル之これを出いでむかへていひけるは

來きたれ我汝われなんぢの索もとむところの人ひとを示しめさんとかれそのところに入いて見みにシセラ鬚げんのあたりに釘子くぎうたれて死したふれをる

二三 其の日に神カナンの王ヤビンをイスラエルの子孫のまへに打敗りたまへり 二四 かくてイスラエルの子孫の手ますます強くなりてカナンの王ヤビンに勝ちつひにカナンの王ヤビンを亡ぼすに至れり

第五章

一 その日デボラとアビノアムの子バラク謳ひていはく 二 イスラエルの首長みちびきをなし民
三 また好んで出でたればエホバを頌美よ 四 もろもろの王よ聴けもろもろの伯よ耳をかたぶけよ我は
五 そもエホバに謳はん我はイスラエルの神エホバを讃へん 六 あゝエホバよ汝セイルより出でエドムの野より進み
七 たまひしとき地震ひ天また滴りて雲水を滴らせたり 八 もろもろの山はエホバのまへに撼動ぎ彼のシナイもイス
九 ラエルの神エホバのまへに撼動げり 十 アナテの子シヤムガルのとときまたヤエルの時には大路は通行る者な
一 途行く人は徑を歩み 二 イスラエルの村莊には住者なく住む者あらずなりけるがつひに我デボラ起れり我起り
三 てイスラエルに母となる 四 人々新しき神を選びければ戦闘門におよべりイスラエルの四萬人のうちに盾或は鎗
五 の見しことあらんや 六 吾が心は民のうちに好んでいたるイスラエルの有司等に傾けり汝らエホバを頌美よ
七 しろき驢馬に乗るもの毛氈に坐するものおよび路歩む人よ汝ら謳ふべし 八 矢叫の聲に遠かり水汲むところ
九 においてエホバの義しき所爲をとなへそのイスラエルを治理めたまふ義しき所爲を唱へよその時エホバの民は門
一〇 に下れり 一一 興よ起よデボラ興よ起よ歌を謳ふべし起てよバラク汝の俘虜を擄きたれアビノアムの子よ
一二 其時民の首長等の殘餘者くだり来るエホバ勇士の中にいまして我にくだりたまふ 一三 エフライムより出る者
一四 ありその根アマレクにありベニヤミン汝のあとにつきて汝の民の中にありマキルよりは牧伯下りゼブルンよりは

イ詩一八・四七 二・一〇 三 哈三・三、一〇 ヌ士四・一七 四 賽四九・二三 ヨ士五・二 五 五
口出一五・一 詩一八 ホ申三三・二 詩六八 ト申四・一一 詩九七 ル利二六・二二 代下 申三三・二六 士二 太士一〇・四、一二 ツ母則一二・七 詩
ハ代下一七・一六 七 七 八 賽二二・八 詩 七 八 賽一・四、四 力母則一三・一九、二 詩一〇七・三三 永詩五七・八 井民三二・三九、四〇
ニ申三二・二三 詩 六八・八 賽六四・一 士三三・三 一八 二 士四・三 二 詩一〇五・二、一四 ナ詩六八・一八

ノ士四・二四 ヤ書一九・二九、三一 士五・三〇 ヨ士四・一五 尼三五 二八
オ民三二・一 マ士四・一〇 フ書一〇・一一 詩 士四・七 ア母前一七・四七、 士四・一七
ク書一三・二五、三一 ケ士四・二六 詩四四 七七・一七、一八 テ士二一・九、一〇 一八・一七、二五、 キ路一・二八
ユ士四・一九
メ士四・二一
ミ出一五・九

一五 采配を執るものいたる 一五 イッサカルの伯たちはデボラとともに居るイッサカルはバラクとおなじく足の進みて
平地に至るルベンの河邊にて大に心にはかる事あり 一六 何故に汝は圏のうちに止まりて羊の群に笛吹くを聴くや
一七 ルベンの河邊にて大に心に考ふることあり 一七 ギレアデはヨルダンの彼方に臥し居る何故にダンは舟のかたはら
一八 に止まりしやアセルは濱邊に坐してその港に臥し居る 一八 ゼブルンは生命を捐て死を冒せる民なり野の高きとこ
一九 ろに居るナフタリまた是の如し 一九 もろもろの王來りて戰へる時にカナンのもろもろの王メギドンの水の
二〇 邊においてタアナクに戰へり彼ら一片の貨幣をも獲ざりき 二〇 天よりこれを攻るものありもろもろの星其の道を
二一 離れてシセラを攻む 二一 キシオンの河之を押し流しぬ是彼の古への河キシオンの河なりわが靈魂よ汝ますます
二二 勇みて進め 二二 その時馬の蹄は強きものの馳に馳るに由りて地を踏鳴せり 二三 エホバの使いひけるはメロズ
二三 を詛ふべし汝ら重ね重ねその民を詛ふべきなり彼等來りてエホバを助けずエホバを助けて猛者を攻めざれば
二四 なり 二四 ケ二人へベルの妻ヤエルは婦女のうちの最も頌むべき者なり彼は天幕に居る婦女のうちの最も頌むべ
二五 きものなり 二五 シセラ水を乞ふにヤエル乳を與ふすなはち貴き盤に乳の油を盛てさゝぐ 二六 ヤエル釘子に手をか
二六 け右の手に重き椎をとりてシセラを打ちその頭を碎きその鬢のあたりをうちて貫ぬく 二七 シセラ、ヤエルの足の
二八 間に屈みて仆れ偃しその足のあはひに屈みて仆れその屈みたるところで仆れ亡ぬ 二八 シセラの母窓より望
二九 み格子のうちより叫びて言ふ彼が車のきたること何て遅きや彼が馬の歩何てはかどらざるやと 二九 その賢き侍女
三〇 こたへをなす（母また獨語して斯いへり） 三〇 かれら獲ものしてこれを分たざらんや人ごとく一人二人の女子を
獲んシセラの獲るものは彩る衣ならんその獲る者は彩る衣にして文繡を施せる者ならん即ち彩りて兩面に文繡

二 をほどこせる衣をえてその頸にまとはんと 三 エホバよ汝の敵みな是のごとくに亡びよかしましたエホバを愛するものは日の眞盛に昇るが如くなれよかしとかくて後國は四十年のあひだ太平なりき

第六章

一 イスラエルの子孫またエホバの目のまへに惡を行ひたればエホバ七年の間之をミデアン人の手に付したまふ 二 ミデアン人の手イスラエルにかてりイスラエルの子孫はミデアン人の故をもて山に

三 ある窟と洞穴と要害とをおのれのために造れり 四 イスラエル人蒔種してありける時しもミデアン人アマレキ人及び東方の民上り來りて押寄せ

五 のうちに生命を維ぐべき物を遺さず羊も牛も驢馬も遺ざりき 六 夫この衆人は家畜と天幕を携へ上り蝗蟲の如くに數多く來りりその人と駱駝は數ふるに勝ず彼ら國を荒さんとして入きたる

七 ン人のために大いに衰へイスラエルの子孫エホバに呼れり 八 エホバひとりの預言者をイスラエルの子孫に遣りて言しめたまひけるはイスラエルの神エホバ斯くいひたまふ我かつて汝らをエジプトより上らせ汝らを奴隸たるの家より出し

九 エジプト人の手およびすべて汝らを虐ぐるものの手より汝らを拯ひいだし汝らの前より彼らを追ひはらひてその邦土を汝らに與へたり 一〇 我また汝らに言り我は汝らの神エホバなり汝らが住み居るアモリ人の國の神を懼るゝなかれとしかるに汝らは我が聲に従はざりき

二 茲にエホバの使者來りてアビエゼル人ヨアシの所有なるオフラの橡の樹のしたに坐す時にヨアシの子ギデオン、ミデアン人に奪はれざらんために酒榨のなかに麥を打ち居たりしが

三 エホバの使之に現れて剛勇丈夫よ

イ詩八三・九、一〇 二士二・一九 一・一・三八 一二・八・一〇 五 二八・三〇、三三、五 五 何五・ワ王下一七・三五、三 ヨ來一・三二
ロ母後二三・四 ホ哈三・七 上四・三〇 伯一・三 一 米六・一五 一五 七、三八 耶一〇・二 太士一三・三
ハ詩一九五 へ母則二三・六 來 才創二九・一 士七・ 利二六・一六 申 又士七・二二 詩四四・二、三 力番一七・二

一書一・五
 二書一・二
 三書一・三
 四書一・四
 五書一・五
 六書一・六
 七書一・七
 八書一・八
 九書一・九
 十書一・一〇
 十一書一・一一
 十二書一・一二
 十三書一・一三
 十四書一・一四
 十五書一・一五
 十六書一・一六
 十七書一・一七
 十八書一・一八
 十九書一・一九
 二十書一・二〇
 二十一書一・二一
 二十二書一・二二
 二十三書一・二三
 二十四書一・二四
 二十五書一・二五
 二十六書一・二六
 二十七書一・二七
 二十八書一・二八
 二十九書一・二九
 三十書一・三〇
 三十一書一・三一
 三十二書一・三二
 三十三書一・三三
 三十四書一・三四
 三十五書一・三五
 三十六書一・三六
 三十七書一・三七
 三十八書一・三八
 三十九書一・三九
 四十書一・四〇
 四十一書一・四一
 四十二書一・四二
 四十三書一・四三
 四十四書一・四四
 四十五書一・四五
 四十六書一・四六
 四十七書一・四七
 四十八書一・四八
 四十九書一・四九
 五十書一・五〇
 五十一書一・五一
 五十二書一・五二
 五十三書一・五三
 五十四書一・五四
 五十五書一・五五
 五十六書一・五六
 五十七書一・五七
 五十八書一・五八
 五十九書一・五九
 六十書一・六〇
 六十一書一・六一
 六十二書一・六二
 六十三書一・六三
 六十四書一・六四
 六十五書一・六五
 六十六書一・六六
 六十七書一・六七
 六十八書一・六八
 六十九書一・六九
 七十書一・七〇
 七十一書一・七一
 七十二書一・七二
 七十三書一・七三
 七十四書一・七四
 七十五書一・七五
 七十六書一・七六
 七十七書一・七七
 七十八書一・七八
 七十九書一・七九
 八十書一・八〇
 八十一書一・八一
 八十二書一・八二
 八十三書一・八三
 八十四書一・八四
 八十五書一・八五
 八十六書一・八六
 八十七書一・八七
 八十八書一・八八
 八十九書一・八九
 九十書一・九〇
 九十一書一・九一
 九十二書一・九二
 九十三書一・九三
 九十四書一・九四
 九十五書一・九五
 九十六書一・九六
 九十七書一・九七
 九十八書一・九八
 九十九書一・九九
 一百書一・一〇〇

一三 エホバ汝とともに在すといひたれば 一三 ギデオン之にいひけるはあゝ吾が主よエホバ我らと偕にいまさばなどて
 これらのことわれらの上に及びたるやわれらの先祖がエホバは我らをエジプトより上らしめたまひしにあらずや
 といひて我らに告たりしその諸の不思議なる行爲は何處にあるや今はエホバわれらを棄てミデアン人の手に付し
 たまへり 一四 エホバ之を顧みていひたまひけるは汝此汝の力をもて行きミデアン人の手よりイスラエルを拯ひ
 いだすべし我汝を遣すにあらずや 一五 ギデオン之にいひけるはあゝ主よ我何をもてかイスラエルを拯ふべき視よ
 わが家はマナセのうちの最も弱きもの我はまた父の家の最も卑賤きものなり 一六 エホバ之にいひたまひけるは我
 かならず汝とともに在ん汝は一人を撃つことを得ん 一七 ギデオン之にいひけるは我も
 し汝のまへに恩を蒙るならば請ふ我と語る者の汝なる證據を見せたまへ 一八 ねがはくは我復び汝に來りわが祭物
 をたづさへて之を汝のまへに供ふるまでこゝを去たまふなかれ彼いひたまひけるは我汝の還るまで待つべし
 一九 ギデオンすなはち往て山羊の羔を調へ粉一エバをもて無酵パンをつくり肉を筐にいれ羹を壺に盛り橡樹の
 下にもち出で之を供へたれば 二〇 神の使之にいひたまひけるは肉と無酵パンをとりて此巖のうへに置き之に羹を
 斟げとすなはちそのごとくに行ふ 二一 エホバの使手にもてる杖の末端を出して肉と無酵パンに觸れたりしかば
 巖より火燃あがり肉と無酵パンを焼き盡せりかくてエホバの使去てその目に見ずなりぬ 二三 ギデオン是において
 彼がエホバの使者なりしを覺りギデオンいひけるはあゝ神エホバよ我面を合せてエホバの使者を見たれば將如何
 せん 二四 エホバ之にいひたまひけるは心安かれ怖るゝ勿れ汝死ぬることあらじ 二五 こゝにおいてギデオン彼所に

エホバのために祭壇を築き之をエホバシヤロムと名けたり是は今日に至るまでアビエゼル人のオフラに存る

二五 其夜エホバ、ギデオンのいひ給ひけるは汝の父の少き牡牛および七歳なる第二の牛を取り汝の父のもてる

二六 バアルの祭壇を毀ち其上なるアシラの像を斫り仆し 汝の神エホバのためにこの堡砦の頂において次序をたゞ

二七 しくし祭壇を築き第二の牛を取りて汝が斫り倒せるアシラの木をもて燔祭を供ぐべし ギデオンすなはちその

僕十人を携へてエホバのいひたまひしごとくに行へりされど父の家のものどもおよび邑の人を怖れたれば晝之を

なすことを得ず夜に入りて之を爲り

二八 邑の衆朝興出て視にバアルの祭壇は摧け其の上なるアシラの像は斫り仆されて居り新に築る祭壇に第二の

二九 牛の供へてありしかば たがひに此は誰が所爲ぞやと言ひつゝ尋ね問ひけるに此はヨアシの子ギデオンの所爲

三〇 なりといふものありたれば 邑の人々ヨアシにむかひ汝の子を曳き出して死なしめよそは彼バアルの祭壇を

三一 摧き其上に在しアシラの像を斫り仆したればなりといふ ヨアシおのれの周圍に立るすべてのものにいひけるは

汝らはバアルの爲に爭論ふや汝らは之を救んとするや之が爲に爭論ふ者は朝の中に死べしバアルもし神ならば人

三二 其祭壇を摧きたれば自ら爭論ふ可なりと 是をもて人衆ギデオンその祭壇を摧きたればバアル自ら之といひ

あらそはんといひて此日かれをエルバアル（バアルいひあらそはん）と呼なせり

三三 茲にミデアン人アマレク人および東方の民相集まりて河を濟りエズレルの谷に陣を取しが エホバの靈

三四 ギデオンの臨みてギデオン箠を吹たればアビエゼル人集りて之に従ふ ギデオン徧くマナセに使者を遣りしかば

マナセ人また集りて之に従ふ彼またアセル、ゼブルン及びナフタリに使者を遣りしにその人々も上りて之を迎ふ

イ創二二・一四 出 口士八・三二 二母則二二・一母後 ホ士六・三 一・二一・一八 代下 二七 又創一八・三二 一・二三 哥前二・二九
一七・一五 耶三三 八出三四・一三 申七 一・二二 耶二一・一 へ書一七・二六 二四・二〇 又創一八・三二 一・二三 哥前二・二九
一六 結四八・三五 五 一三 何九・二〇 ト士三・一〇 代上 十民一〇・三 士三・一 出四・三四、六、七 申八・一七 賽二〇 申二〇・八

三六 ギデオン神にいひけるは汝かつていひたまひしごとくわが手をもてイスラエルを救はんとしたまは
三七 視よ我一箇の羊の毛を禾場におかん露もし羊毛にのみおきて地はすべて燥きをらば我之れによりて汝がかつ
三八 て言たまひし如く吾が手をもてイスラエルを救ひたまふを知んと すなはち斯ありぬ彼明る朝早く興きいで
三九 羊毛をかき寄てその毛より露を搾りしに鉢に満つるほどの水いできたる ギデオン神にいひけるは我にむかひ
四〇 て怒を發したまふなかれ我をしていま一回いはしめたまへねがはくは我をして羊の毛をもていま一回試さしめた
まへねがはくは羊毛のみを燥して地には悉く露あらしめたまへと その夜神かくの如くに爲したまふすなはち
羊毛のみ燥きて地には凡て露ありき

第七章

一 斯てエルバアルと呼るゝギデオンおよび之とともにあるすべての民朝風に興きいでてハロデの井
のほとりに陣を取るミデアン人の陣はかれらの北の方にあたりモレの山に沿ひ谷のうちにありき

二 エホバ、ギデオンにいひたまひけるは汝とともに在る民は餘りに多ければ我その手にミデアン人を付さじ
おそらくはイスラエル我に向ひ自ら誇りていはん我わが手をもて己を救へりと されば民の耳に告示していふ
べし誰にても懼れ慄くものはギレアデ山より歸り去るべしとこゝにおいて民のかへりしもの二萬二千人あり殘し
ものは一萬人なりき

四 エホバまたギデオンにいひたまひけるは民なほ多し之を導きて水際に下れ我かしこにて汝のために彼らを
試みんおほよそ我が汝に告て此人は汝とともに行くべしといはんものはすなはち汝とともに行くべしまたおほよ
そ我汝に告て此人は汝とともに行くべからずといはんものはすなはち行くべからざるなり ギデオン民をみち
びきて水際に下りしにエホバ之にいひたまひけるはおほよそ犬の餌るがごとくその舌をもて水を餌るものは汝之

大 を別けおくべしまたおほよそ其の膝を折り屈みて水を飲むものをも然すべしと 手を口にあてゝ水を飮しもの

七 の数は三百人なり餘の民は盡くその膝を折り屈みて水を飮り エホバ、ギデオンにいひたまひけるは我水を

八 飮たる三百人の者をもて汝らを救ひミデアン人を汝の手に付さん餘の民はおのおの其所に歸るべしと ころに

おいて彼ら民の兵糧とその箠を手にうけとれりギデオンすなはちすべてのイスラエル人を各自その天幕に歸らせ

彼の三百人を留めおけり時にミデアン人の陣はその下の谷のなかにありき

九 一〇 九 その夜エホバ、ギデオンにいひたまはく起よ下りて敵陣に入るべし我之を汝の手に付すなり されど

二 汝もし下ることを怖れなば汝の僕フラを伴ひ陣所に下りて 彼らのいふ所を聞べし然せば汝の手強くなりて汝

三 敵陣にくだることを得んとギデオンすなはち僕フラとともに下りて陣中にある隊伍のほとりに至るに ミデア

ン人アマレク人およびすべて東方の民は蝗蟲のごとくに數衆く谷のうちに偃しをりその駱駝は濱の砂の多きが

三 ごとくにして數ふるに勝ず ギデオン其處に至りしに或人その伴侶に夢を語りて居りすなはちいふ我夢を見た

四 一四 一四 りしが夢に大麥のバンひとつミデアンの陣中に轉びいりて天幕に至り之をうち仆し覆したれば天幕倒れ臥り

其の伴侶答へていふ是イスラエルの人ヨアシの子ギデオンの劍に外ならず神ミデアンとすべての陣營を之が

手に付したまふなりと 一五 一五 ギデオン夢の説話とその解釋を聞しかば拜をなしてイスラエルの陣所にかへりいひけるは起よエホバ汝ら

一六 の手にミデアンの陣をわたしたまふと かくて三百人を三隊にわかち手に手に箠および空瓶を取せその瓶の

一七 なかに燈火をおかしめ 一七 これにいひけるは我を視てわが爲すところにならへ我が敵陣の邊に至らんとときに爲す

ホ出二四・一三・二四 ト書六・四・一六・二〇 リ母前二四・二〇 代ル約一・二八 一一
代下二〇・一七 哥後四・七 下二〇・二三 士三三・二八 一〇・二六
ヘ至下七・七 詩八三・九 賽九・四 又士三三・二七 士八・三 詩八三・ ヨ士八・四 一九・四一 母後

一八 ごとく汝らも爲すべし 我およびわれらとともに在るものすべて 箴を吹ば汝らもまたすべて陣營の四方にて

箴を吹き此エホバのためなりギデオンのためなりといへ

一九 而してギデオンおよび之とともになる百人中更の初に陣營の邊に至るにをりしも番兵を更代たるときなり

二〇 ければ箴を吹き手に携へたる瓶をうちくだけり 即ち三隊の兵隊箴を吹き瓶をうちくだき左の手には燈火を

二 執り右の手には箴をもちて之を吹きエホバの劍ギデオンの劍なるぞと叫べり かくておのおのその持場に立ち

三 陣營を取り圍みたれば敵軍みな走り叫びてにげゆけり 三百人のもの箴を吹くにあたりエホバ敵軍をしてみな

たがひに同士撃せしめたまひければ敵軍にげはしりてゼレラのベテシツダ、アベルメホラの境およびタバテに至

三 する イスラエルの人々すなはちナフタリ、アセルおよびマナセ中より集ひ來りてミデアン人を追撃り

二四 ギデオン使者をあまねくエフライムの山に遣していはせけるは下りてミデアン人を攻めベタバラにいたる

渡口およびヨルダンを遮断るべしと是においてエフライムの人盡く集ひ來りてベタバラにいたる渡口および

二五 ヨルダンを取り ミデアン人の君主オレブとゼエブの二人を俘へてオレブをばオレブ磐の上に殺しゼエブをば

ゼエブの酒搾のほとりに殺したまたミデアン人を追撃ちオレブとゼエブの首を携へてヨルダンの彼方よりギデオン

の許にいたる

第八章

一 エフライムの人々ギデオンにむかひ汝ミデアン人と戦はんとて往る時われらを召ざりしが斯る
二 ことを我らになすは何故ぞといひていたく之を詰りたり ギデオンこれにいひけるは今吾が成る

ところは汝らのなせる所に比ぶべけんやエフライムの拾ひ得し遺餘の葡萄はアビエゼルの收穫し葡萄にも勝れる

ならずや 神はミデアンの群伯オレブとゼエブを汝等の手に付したまへりわが成えたるところは汝らの成る

ところ比ぶべけんやとギデオンの語をのべしかば彼らの憤解たり

ギデオン自己に従がへる三百人とともにヨルダンに至りて之を濟り疲れながらも仍追撃しけるが 遂に

スコテの人々に言けるは願くは我にしたがへる民に食を與へよ彼等疲れをるに我ミデアンの王ゼバとザルムンナ

を追行なりと スコテの群伯等いひけるはゼバとザルムンナの手すでに汝の手のうちに在るや我らなんぞ汝の

軍勢に食を與ふべけんや ギデオンいひけるは然らばエホバの吾が手にゼバとザルムンナを付したまふときに

我野の荊と棘とをもて汝の肉を打つべしと かくて其所よりペヌエルにのほりおなじことを彼らにのべたるに

ペヌエルの人もスコテの人の答へしごとくに答へしかば またペヌエルの人につげていひけるは我平康に歸る

ときに此の城樓を毀つべしと

儲ゼバとザルムンナはその軍勢おほよそ一萬五千人をひきゐてカルコルに居る是皆東方の人の全軍の中の

生殘れるものなり戦死せし者は劍を抜ところのもの十二萬人ありき ギデオンすなはちノバとヨグベバの東に

て天幕にすめるものの路より上りて敵軍の虞りなく居るを撃り こゝにおいてゼバとザルムンナにげ走りた

ればギデオンの之を追撃ちミデアンの二人の王ゼバとザルムンナを生捕て悉くその軍勢を敗れり

斯てヨアシの子ギデオン、ヘレシの阪よりして戰陣よりかへり スコテの人の少壯者一人を執へて之に

尋ねたれば即ちスコテの群伯およびその長老等七十七人をこれがために書き録せり ギデオン、スコテの人の

所に詣りていひけるは汝らが曾て我を罵りゼバとザルムンナの手すでに汝の手のうちにあるや我ら何ぞ汝の疲れ

イ士七・二四、二五 八・三三・一七 詩 ホ母前二五・一一

申二・三

六〇・六

ヘ士八・一六

ト創三三・三〇 王上 一・二五

チ王上二二・二七

又士七・二二

ル士二〇・二、一五、一

二六

ヲ民三二・三五、四二

カ詩八三・一一

口機一五・一

ニ王上二〇・一一

ト創三三・三〇

王上 一・二五

リ士八・一七

七、二五

王下三・

ヲ士一八・二七

機前 ヨ士八・六

五・三

タ士八・七
レ王上二二・二五
ツ士八・九
ツ士四・六
詩八九・ナ
ナ摩前八・七、一〇・
一九、二二・二二
ラ創二五・二三、三七
ウ士六・二四

非詩一〇六・三九
ノ申七・一六

一六 たる人に食をあたふべけんやと言たりしそのゼバとザルムンナを見よと 一六 すなはちその邑の長老等を執へ野の

一七 荊と棘を取り之をもちてスコテの人を懲し 一七 またベヌエルの城樓を毀ちて邑の人を殺せり

一八 かくてギデオン、ゼバとザルムンナにいひけるは汝らがタボルにて殺せしものは如何なるものなりしや

一九 答へていふ彼らは汝に似てみな王子の如くに見えたり 一九 ギデオンいひけるは彼らは我が兄弟我が母の子なりエ

二〇 ホバは活く汝らもし彼らを生し置たらば我汝らを殺すまじきをと 二〇 すなはちその長子エテルに起て彼らを殺せ

二一 といひたりしが彼の少者は年尙わかゝりしかば懼れて劍を拔ざりき 二一 ことにおいてゼバとザルムンナにいひける

は汝みづから起て我らを撃よ人の如何によりてその力量異なる者なりとギデオンすなはち起てゼバとザルムンナを

殺しその駱駝の頸にかけたる半月の飾を取り

二三 茲にイスラエルの衆ギデオンにいひけるは汝ミデアンの手より我らを救ひたれば汝と汝の子及び汝の孫

我らを治めよ 二三 ギデオン之にいひけるは我汝らを治むることをせじまた我が子も汝らを治むべからずエホバ汝

らを治めたまふべし 二四 ギデオンまた之にいひけるは我汝らにひとつの願ふべきことあり汝らのおの掠取の環

を我にあたへよとはは彼らイシマエル人なるをもて金の環を着けたるに由る 二五 衆答へけるは我ら悦んで之を

與へんとて衣を布きおのおの掠取の環を其うちに投げいれたり 二六 ギデオンが求め得たる金の環の重量は金一千

七百シケルなり外に半月の飾および耳環とミデアンの王たちの着たる紫のころもおよび駱駝の頸にかけたる鏈な

どもありき 二七 ギデオン之をもて一箇のエポデを造り之をおのれの郷里オフラに藏むイスラエルみなこれを慕ひ

二八 てこれと淫をおこなふこの物ギデオンと其家を陥るゝ器となりぬ 二八 ミデアン人は是の如くイスラエルの子孫に

攻ふせられてふたゝびその頭を擡ることを得ざりきかくて國はギデオンの世にある中四十年の間平穩にてありき
ヨアシの子エルバアル往ておのれの家に住り
ギデオンは妻を多く有ちたれば其身より出たる子七十人
ありき
シケムに居しその妾またひとりの子を産たれば之をアビメレクと名けたり
ヨアシの子ギデオン
妙齡に邁みて死にアビエゼル人のオフラに在るその父ヨアシの墓に葬られたり
ギデオンの死るに及びてイスラエルの子孫復ひるがへりてバアルを慕ひてこれと淫をおこなひバアルベリ
テをおのれの神と爲り
イスラエルの子孫その四周のもろもろの敵の手よりおのれを救ひ出したまひし神エホ
バを記憶えず
またエルバアルといふギデオンがイスラエルになせし諸の善行にしたがひて彼の家を厚く待ふ
ことをせざりき

第九章

エルバアルの子アビメレク、シケムに往きその母の兄弟のもとに至りて彼らおよびすべて其母の
父の家の一族に語りて云ひけるは
ねがはくはシケムのすべての民の耳に斯く告よエルバアルの
すべての子七十人して汝らを治むると一人して汝らを治むると孰れか汝らのためによきやまた我は汝らの骨肉
なるを記えよと
その母の兄弟アビメレクのことにつきて此等の言をことごとくシケムの人々の耳に語りしに
是はわれらの兄弟なりといひて心をアビメレクに傾むけ
バアルベリテの社より銀七十をとりて之に與ふアビ
メレクこれをもて遊蕩にして輕躁なる者等を傭ひておのれに従はせ
オフラに在る父の家に往きてエルバアル
の子なるその兄弟七十人を一つの石の上に殺せり但しエルバアルの季の子ヨタムは身を潜めしに由て遺されたり
こゝにおいてシケムのすべての民およびミロの諸の人集り往てシケムの碑の旁なる橡樹の邊にてアビメレク

イ士五・三一
ロ士九・二、五
ハ士九・一

二創二五・八 伯五・
二六 へ士二・一九
ト士二・一七
ホ士八・二七、六・二四 士九・四、四六

リ詩七八・一一、四二、
一〇六・一三、二一 八傳九・一四、一五
一〇六・一三、二一 八傳九・一四、一五
又士九・二六、一七、一 士八・三〇

ワ創二九・一四
カ創二九・一五
ヨ士八・二三

タ士一・三 代下 士六・二四
一三・七 彼二二・
一 徒一七・五 ツ書二四・二六

ナ申一・二九、二七 ナ王下一四・九
・二二 番八・三三 ラ士八・三三、二三
約四・二〇 ム詩一〇四・一五
ウ詩一〇四・一五
井賽三〇・二 但四・
一二 何一四・七
ノ士九・二〇 民二一
・二八 結一九・一四
オ王下一四・一九 詩
一〇四・一六 賽二
・二三、三七・二四 ク士八・三五
結三一・三 ヤ士九・五六
マ賽八・六 腓三・三 フ母後二〇・一四
ケ士九・一五、五六、
五七

を立て王となしけるが

七 ヨタムにかくと告るものありければヨタム往てグリジム山の巔に立ち聲を揚て號びかれらにいひけるはシ

八 ケムの民よ我に聽よ神また汝らに聽たまはん 樹木出ておのれのうへに王を立んとし橄欖の樹に汝われらの王

九 となれよといひけるに 橄欖の樹之にいふ我いかで人の我に取て神と人とを崇むるところのそのわが油を棄て

二〇 往て樹木の上に戦ぐべけんやと 樹木また無花果樹に汝來りて我らの王となれといひけるに 無花果樹之に

二一 いひけらく我いかでわが甜美とわが善き果を棄て往きて樹木のうへに戦ぐべけんやと 樹木また葡萄の樹に汝

二二 來りて我らの王となれよといふに 葡萄の樹之にいひけるは我いかで神と人を悦こばしむるわが葡萄酒を棄て

二四 往て樹木のうへに戦ぐべけんやと ことにおいてすべての樹木荊に汝來りて我らの王となれよといひければ

二五 荊樹木にいふ汝らまことに我を立て汝らの王と爲さば來りて我が庇蔭に托れ然せずば荊より火出てレバノン

二六 の香柏を燒き殫すべしと 抑汝らがアビメレクを立て王となせしは眞實と誠意をもて爲しことなるや汝等は

二七 エルバアルと其家を善く待ひかれの手のなせし所に循ひて之にむくいしや 夫わが父は汝らのため戦ひ生命を

二八 惜まずして汝らをミデアンの手より救ひ出したるに 汝ら今日おこりてわが父の家を攻めその子七十人を一つ

二九 の石の上に殺しその侍妾の子アビメレクは汝らの兄弟なるをもて之を立てシケムの民の王となせり 汝らが

三〇 今日エルバアルとその家になせしこと眞實と誠意をもてなせし者ならば汝らアビメレクのために悦べ彼も汝らの

三〇 ために悦ぶべし 若し然らずばアビメレクより火いでてシケムの民とミロの家を燬つくさんまたシケムの民と

三二 ミロの家よりも火いでてアビメレクを燬つくすべしと かくてヨタム走り遁れてベエルに往きその兄弟アビメ

レクの面を避て彼所に住めり

二二 アビメレク三年の間イスラエルを治めたりしが

二三 神アビメレクとシケムの民のあひだに惡鬼をおくりた

二四 まひたればシケムの民アビメレクを欺くにいたる

二五 是エルバアルの七十人の子が受たる殘忍と彼らの血のこれ

を殺せしその兄弟アビメレクおよび彼の手に力をそへてその兄弟を殺さしめたるシケムの人々に報い來るなり

二六 シケムの人伏兵を山の巔に置いて彼を窺はしめ其途を経て傍を過る者を見て褫しめたり或人之をアビメレクに

告ぐ

二七 こゝにエベデの子ガアル其の兄弟とともにシケムに越ゆきたりしかばシケムの民かれを恃めり

民田野

二八 に出て葡萄を收穫れこれを踐み絞りにて祭禮をなしその神の社に入り食ひかつ飲みてアビメレクを詛ふ

エベデ

の子ガアルいひけるはアビメレクは如何なるものシケムは如何なるものなればか我ら彼に従ふべき彼はエルバア

ルの子に非ずやゼブルその輔佐なるにあらずやむしろシケムの父ハモルの一族に事ふべし我らなんぞ彼に事ふべ

二九 けんや 嗚呼此の民を吾が手に屬しむるものがな然ば我アビメレクを除かんと而してガアル、アビメレクに

汝の軍勢を益て出きたれよと言ひ

三〇 邑の宰ゼブル、エベデの子ガアルの言をきゝて怒を發し 私かに使者をアビメレクに遣りていひけるは

三一 エベデの子ガアル及びその兄弟シケムに來り邑をさわがして汝に敵せしめんとす 然ば汝及び汝と共なる民

三二 夜の中に興て野に身を伏よ 而て朝に至り日の昇る時汝夙く興出て邑に攻かゝれガアル及び之とともになる民

出て汝に當らん汝機を見てこれに事をなすべし

イ母前二六・一四、 二二 代下一〇・ 口賽三三・一 太二三・三五、三六 ホ士九・四 ト創三四・二、六
一八・九、一〇 王上 一五 一八・一九 ハ王上二・三二 帖九 二 賽一六・九、一〇 耶 へ母前二五・一〇 王 子母後一五・四
二二・一五、 二二・ 賽一九・二、一四 二五 詩七・一六 二五・三〇 上二・一六 子母前一〇・七、二五
八 傳九・一〇

又申一八・一四　ワ申二九・二三　王上　カ士八・三三
ル士九・二八・二九　一二・二五　王下三　ヨ六八・一四
ヲ士九・二〇　二五

三四

アビメレクおよび之とともになるすべての民夜の中に興出て四隊に分れ身を伏てシケムを伺ふ　三五　エペデの

三六

子ガアル出て邑の門の口に立るにアビメレク及び之とともになる民その伏たるところより起りしかば　三六　ガアル

民を見てゼブルにいひけるは視よ民山の峰々より下るとゼブル之に答へて汝山の影を見て人と倣すのみといふ

三七

ガアルふたゝび語りていひけるは視よ民地の高處より下りまた一隊は法術士の椽樹の途より來ると　三八　ゼブ

ル之にいひけるは汝がかつてアビメレクは何者なればか我ら之に事ふべきといひし其汝の口今いづこに在るや是

三九

汝が侮りたる民にあらずや今乞ふ出て之と戦へよと　三九　こゝにおいてガアル、シケム人を率ゐ往てアビメレクと

四〇

戦ひしが　アビメレク之を追くづしたればガアル其まへより逃走れりかくて殺されて斃るゝもの多くして邑の

門の口までに及ぶ

四一

かくてアビメレクはアルマに居しがゼブルはガアルおよびその兄弟等を逐いだしてシケムに居ることを得

四二

ざらしむ　あくる日民田畑に出しに人之をアビメレクに告げしかば　四三　アビメレクおのれの民を率ゐてこれを

四四

三隊に分ち野に埋伏して伺ふに民邑より出來りたればすなはち起りて之を撃り　四四　アビメレクおよび之とともに

四五

在る隊の者は襲ひゆきて邑の門の入口に立ち餘の二隊は野に在るすべてのものをおそふて之を殺せり　四五　アビメ

レク其日終日邑を攻めつひに邑を取りてそのうちの民を殺し邑を破却ちて鹽を撒布ぬ

四六

シケムの櫓の人みな之を聞てベリテ神の廟の塔に入たりしが　四七　シケムの櫓の人のことごとく集れるよし

四八

アビメレクに聞えければ　アビメレク已とともになる民をことごとく率ゐてザルモン山に上りアビメレク手に斧

を取り木の枝を斫落し之をおのれの肩に載せ偕に居る民にむかひて汝ら吾が爲とてところを見る急ぎてわがごとく爲

四九 せよといひしかば 民もまた皆おのおのその枝を斫りおとしアビメレクに従ひて枝を塔に倚せかけ塔に火を
かけて彼等を攻むことにおいてシケムの櫓の人もまた悉く死に男女およそ一千人なりき

五〇 茲にアビメレク、テベツに赴きテベツに對て陣を張て之を取しが 邑のなかに一の堅固なる櫓ありて

五二 すべての男女および邑の民みな其所に遁れ往き後を鎖して櫓の頂に上りたれば アビメレクすなはち櫓のもと

五三 に押寄て之を攻め櫓の口に近きて火をもて之を焚んとせしに 一人の婦アビメレクの頭に磨石の上層石を投げ

五四 てその脳骨を碎けり アビメレクおのれの武器を執る少者を急ぎ召て之にいひけるは汝の劍を抜て我を殺せ

五五 おそらくは人吾をさして婦に殺されたりといはんと其少者之を刺し通したればすなはち死に イスラエルの

五六 人々はアビメレクの死たるを見ておのおのその處に歸り去りぬ 神はアビメレクがその七十人の兄弟を

五七 殺しておのれの父になしたる惡に斯く報いたまへり またシケムの民のすべての惡き事をも神は彼等の頭に報

いたまへりすなはちエルバアルの子ヨタムの詛彼らの上に及べるなり

第一章

一 アビメレクの後イッサカルの人にてドドの子なるブワの子トラ起りてイスラエルを救ふ彼エフラ
二 イムの山のシヤミルに住み 二十三年の間イスラエルを審判しがつひに死にシヤミルに葬らる

三 彼の後にギレアデ人ヤイル起りて二十二年の間イスラエルを審判たり 彼に子三十人ありて三十の驢馬

四 に乗る彼等三十の邑を有りギレアデの地において今日までヤイルの村となふるものすなはち是なり ヤイル

五 死てカモンに葬らる

六 イスラエルの子孫ふたゝびエホバの日のまへに惡を爲しバアルとアシタロテ及びスリヤの神シドンの神モ

イ母後一一・二一 詩九四・二三 ホ士二・二六 ト申三・一四 民三二 四・一、六・一、一三 ヌ士二・二二
口母前三一・四 第五・二二 へ士五・一〇、一二・一 四・一 王上一・三三 詩
ハ士九・二四 伯三一 二士九・二〇 一四 士二・一一、三・七、リ士二・二三 一〇六・三六 一二・九
ヲ士二・一四 母前

ワ 母則一・二・一〇 二五
カ 出四・三〇 六三
ヨ 民二一・二二・二四、レ 士三・三一
ソ 士五・一九
ツ 士六・三
ネ 詩一〇六・四二、
四三
ナ 申三二・一五 耶二
ラ 士三二・三七、三八 ム 民前三・一八 母後
王 下三・一三 耶二
一五・二六
ウ 代下七・一四、一五
八 耶一八・七、八 ノ 創三一・四九 士
井 詩一〇六・四四、四
五 賽六三・九
オ 創一一・八、一一

七 アブの神アンモンの子孫の神ペリシテ人の神に事へエホバを棄て之に事へざりき エホバ烈しくイスラエルを
八 怒りて之をペリシテ人及びアンモンの子孫の手に賣付したまへり 其年に彼らイスラエルの子孫を虐げ難せり
九 ヨルダンの彼方においてギレアデにあるところのアモリ人の地に居るイスラエルの子孫十八年の間斯せられたり
九 き アンモンの子孫またユダとベニヤミンとエフライムの族とを攻んとてヨルダンを渡りしかばイスラエル
太く苦めり

一〇 こゝにおいてイスラエルの子孫エホバに呼びていひけるは我らおのれの神を棄てバアルに事へて汝に罪を
犯したりと エホバ、イスラエルの子孫にいひたまひけるは我かつてエジプト人アモリ人アンモンの子孫ペリ
二 シテ人より汝らを救ひ出せしにあらずや 又シドン人アマレク人及びマオン人の汝らを困しめしとき汝ら我に
三 呼びしかば我汝らを彼らの手より救ひ出せり 然るに汝ら我を棄て他の神に事ふれば我かさねて汝らを救はざ
四 るべし 汝らが擇める神々に往て呼れ汝らの艱難のときに之をして汝らを救はしめよ イスラエルの子孫
五 エホバに言けるは我ら罪を犯せりすべて汝の目に善と見るところを我らになしたまへねがはくは唯今日我らを
六 救ひたまへと 而して民おのれの中より異なる神々を取除きてエホバに事へたりエホバの心イスラエルの艱難
七 を見るに忍びずなりぬ

一七 茲にアンモンの子孫集てギレアデに陣を取りしがイスラエルの子孫は聚りてミヅバに陣を取り 時に民
一八 ギレアデの群伯たがひにいひけるは誰かアンモンの子孫に打ちむかひて戦を始むべき人ぞ其人をギレアデのすべ
一九 ての民の首となすべしと

・一 申一・四六
 夕民二〇・一四
 夕民二〇・一八、二一
 ツ民二〇・一
 一八
 申二・ナ民二一・一三、二二
 三六
 ラ民二一・二一 申二
 ・二七
 夕民二一・二三 申二
 三三
 井民二一・二四、二五
 申二・二三、三四
 申二・三六
 ノ申二・三六
 夕民二一・二九 王上
 一一・七 耶四八・七
 夕民二二・一 卷三・一〇
 夕民二二・一 卷二四
 九

トより上りきたりし時にアルノンよりヤボクにいたりヨルダンに至るまで吾が土地を奪ひしが故なり然ば今穩便
 に之を復すべし エフタまた使者をアンモンの子孫の王に遣りて之にいはせけるは エフタ斯いへりイスラ
 エルはモアブの地を取ずまたアンモンの子孫の地をも取ざりしなり 夫イスラエルはエジプトより上りきたれ
 るときに曠野を経て紅海に到りカデシに來れり 而してイスラエル使者をエドムの王に遣して言けるはねがは
 くは我をして汝の土地を経過しめよと然るにエドムの王之をうけがはずまたおなじく人をモアブの王に遣したれ
 ども是もうべなはざりしかばイスラエルはカデシに留まりしが 遂にイスラエル曠野を経てエドムの地および
 モアブの地を繞りモアブの地の東の方に出てアルノンの彼方に陣を取り然どモアブの界には入らざりきアルノン
 はモアブの界なればなり かくてイスラエル、ヘシボンに王たりしアモリ人の王シホンに使者を遣せりすなは
 ちイスラエル之にいひけらくねがはくは我らをして汝の土地を経過てわがところにいたらしめよと 然るにシ
 ホン、イスラエルを信ぜずしてその界をとほらしめずかへつてそのすべての民を集めてヤハヅに陣しイスラエル
 とたゝかひしが イスラエルの神エホバ、シホンとそのすべての民をイスラエルの手に付したまひたればイス
 ラエル之を擊敗りてその土地にすめるアモリ人の地を悉く手に入れ アルノンよりヤボクに至るまでまた曠野
 よりヨルダンに至るまですべてアモリ人の土地を手に入たり 斯のごとくイスラエルの神エホバは其の民イス
 ラエルのまへよりアモリ人を逐しりぞけたまひしに汝なほ之を取んとする乎 汝は汝の神ケモシが汝に取し
 むるものを取ざらんやわれらは我らの神エホバが我らに取しむる物を取ん 汝は誠にモアブの王チツポルの子
 バラクにまされる處ありとするかバラク曾てイスラエルとあらそひしことありや曾て之とたゝかひしことありや

二六 イスラエルがヘシボンとその村里アロエルとその村里およびアルノンの岸に沿ひたるすべての邑々に住ること
二七 と三百年なりしに汝などてかその間に之を回復さざりしや 我は汝に罪を犯せしことなきに汝はわれとたゝか
二八 ひて我に害をくはへんとす願くは審判をなしたまふエホバ今日イスラエルの子孫とアンモンの子孫との間を鞫き
二九 たまへと しかれどもアンモンの子孫の王はエフタのいひつかはせる言を聴いれざりき
三〇 こゝにエホバの霊エフタに臨みしかばエフタすなはちギレアデおよびマナセを経過りギレアデのミヅバに
三〇 いたりギレアデのミヅバよりすゝみてアンモンの子孫に向ふ エフタ、エホバに誓願を立ていひけるは汝誠
三一 にアンモンの子孫をわが手に付したまはゞ 我がアンモンの子孫の所より安らかに歸らんときに我家の戸より
三二 出きたりて我を迎ふるもの必ずエホバの所有となるべし我之を燔祭となしてさゝげんと エフタすなはちアン
三三 モンの子孫の所に進みゆきて之と戦ひしにエホバかれらをその手に付したまひしかば アロエルよりミンニテ
三三 にまで至りこれが二十の邑を打敗りてアベルケラミムにいたり甚だ多の人をころせりかくアンモンの子孫はイス
ラエルの子孫に攻伏られたり
三四 かくてエフタ、ミヅバに來りておのが家にいたるに其女鼓を執り舞ひ踊りて之を出で迎ふ是彼が獨子に
三五 て其のほかには男子もなくまた女子も有ざりき エフタ之を視てその衣を裂ていひけるはあゝ吾が女よ汝實
三六 に我を傷しむ汝は我を惱すものなり其は我エホバにむかひて口を開きしによりて改むることあたはざればなり
三六 女之にいひけるはわが父よ汝エホバにむかひて口をひらきたれば汝の口より言出せしごとく我になせよ其は
三七 エホバ汝のために汝の敵なるアンモンの子孫に仇を復したまひたればなり 女またその父にいひけるはねがは
(タ)

イ民二一・二五
口申二・三六
ハ創一八・二五

二創一六・五、三一、ホ士三・一〇
五三 母前二四・一、ヘ創二八・二〇 母前
二、二五 一・一一

ト利二七・二三、母前 二七・二八、二
一・一一、二八、二 二
リ結二七・二七

リ出二五・二〇 母前 一八・六、詩六八、
二五、耶三一・四、カ民三〇・二、詩一五

一八・六、詩六八、
二五、耶三一・四、カ民三〇・二、詩一五
四、傳五・四、五

くは此事をわれに允せすなはち二月の間我をゆるし我をしてわが友等とともに往て山にくだりてわが處女たるこ
とを歎かしめよと エフタすなはち往けといひて之を二月のあひだ出し遣ぬ女その友等と共に往き山の上にて
おのれの處女たるを歎きしが 二月満てその父に歸り來りたれば父その誓ひし誓願のごとくに之に行へり女は
終に男を知ことなかりき 是よりして年々にイスラエルの女子等往て年に四日ほどギレアデ人エフタの女の
ために哀哭ことをなす是イスラエルの規矩となれり

第一章

エフライムの人々つどひて北にゆきエフタにいひけるは汝何故に往きてアンモンの子孫と戦ひ
ながらわれらをまねきて汝とともに行せざりしや我ら火をもて汝の家を汝と共に焚くべしと
フタ之にいひけるは我とわが民の曾てアンモンの子孫と大に争ひしときに我汝らをよびしに汝らかれらの手より
我を救ふことをせざりき 我汝らが我を救はざるを見たればわが命をかけてアンモンの子孫の所に攻めきしに
エホバかれらを我が手に付したまへり然ば汝らなんぞ今日我が許に上り來りて我とたゝかはんとするやと
フタこゝにおいてギレアデの人をことごとくつどへてエフライムとたゝかひしがギレアデの人々エフライムを撃
破れり是はエフライム汝らギレアデ人はエフライムの逃亡者にしてエフライムとマナセの中にをるなりと言しに
由る 而してギレアデ人エフライムにおもむくところのヨルダンの津をとりきりしがエフライム人の逃れ來る
者ありて我を渡らせよといへばギレアデの人之に汝はエフライム人なるかと問ひ彼もし然らずと言ときは
また之に請ふシボレテといへといふに彼その音を正しくいひ得ずしてセボレテと言ばすなはち之を引捕へて
ヨルダンの津に屠せりその時にエフライム人のたふれし者四萬二千人なりき

七
エフタ六年ねんのあひだイスラエルを審さきたりギレアデ人びとエフタつひに死してギレアデのある邑まちに葬はうむらる

八
彼の^{かれ}後に^{のち}ベテレヘムのイブザン、イスラエルを審^さきたり

九
彼に^{かれ}三十人^{にん}の男子^{むすこ}ありまた三十人^{にん}の女子^{むすめ}あり

しがこれをば外ほかに嫁とがしめてその子息等むすこらのために三十人にんの女むすめを外ほかより娶めとれり彼七年かれせんだいしちねんのあひだイスラエルを審さぐき

たり
イブザンつひに死しにてベテレヘムに葬はうむらる

二
二
彼の^{かれ}後に^{のち}ゼブルン人^{びと}エロン、イスラエルを^{さば}審きたりゼブルン人^{びと}エロン十年^{ねん}のあひだイスラエルを^{さば}審きたり

三
三
ゼブルン人^{ひと}エロンつひに^{しに}死てゼブルンの地^ちのアヤロンに^{はう}葬むらる

一三 一四
 一三 彼かれののち後にピラトン人びとヒレルの子こアブドン、イスラエルを審さばきたり
 一四 彼かれに四十人にんの男子むすこおよび三十人にんの孫みこ

二五
ありて七十の驢馬ろばに乗のる彼かれ八年ねんのあひだイスラエルを審さばけり

二五
ピラトン人びとヒレルの子こアブドンあぶどんつひに死してエフ

ライムの地のピラトンに葬むる是はアマレク人の山にあり

イスラエルの子孫またエホバのまへにて惡を行ひしかばエホバこれを四十年の間ペリシテ人の手

第三章

にわたしたまへり

こゝにダン人の族にて名をマノアとよべるゾラ人あり其の妻は石婦にして子を生みしことなし

つかひ　　をんな　あらは　これ
の使その女に現れて之にいひけるは汝は石婦にして子を生しことあらず然ど汝孕みて子をうまん
（え）こ　うみ　され　なんぢはら　こ
されば汝
四

五 つゝしみて葡萄酒および濃き酒を飲むことなかれまたすべて穢たるものを食ふなかれ

五 視よ汝孕みて子を産ん

其それの頭かうべには剃刀(ト)かみそりをあつべからずその兒こは胎はらを出るよりして神かみのナザレ人びとかみに身を獻ささげし者ものたるべし彼かれペリシ

テ人の手よりイスラエルを拯すくひ始めんと
六
その婦人來りて夫に告て曰けるは神の人我にのぞめりその容貌は

イ士五・一〇、一〇・四
ハ士三・二一、三・七、
ニ母前一二・九
一、一三、二八、
チ民六・五
母前一、
又母前七・一三
母後
ル申三三・一
母前二
ヲ太二八・三
路九
口士三・一三、二七、五
四・一、六・一、一〇
ホ番一九・四一
三一
八・二代上一八・一
一七・二四
・二四
六
ヘ士六・一二
路一、
ト士一三・一四
民六

二四・六
路一・卜士一三・四民六
八・一代上一八・一

一七・二四

二四
六
卷之三
路一
十五
三
四
具
二

八
十一
上
八
一

二十七

神の使の容貌のごとくにして甚おそろしかりしが我其のいづれより來れるやを問ず彼また其の名を我に告ざりき
七 彼我にいひけるは視よ汝孕みて子を産まん然ば葡萄酒および濃き酒を飲むなかれまたすべてけがれたるものを
食ふなかれその兒は胎を出るより其の死る日まで神のナザレ人たるべしと

八 マノア、エホバにこひ求めていひけるはあゝわが主よ汝がさきに遣はしたまひし神の人をふたゝび我らに
九 のぞませ之をして我らがその産るゝ兒になすべき事を教へしめたまへ 神マノアの聲をきゝいれたまひて神の
一〇 使者婦人の田野に坐しをる時に復之にのぞめり時に夫マノアは共にをらざりき 是において婦いそぎ走りて

二 夫に告て之にいひけるは先頃我にのぞみし人また我に現はれたりと マノアすなはち起て妻のあとに付て行き
三 其人のもとに至りて之に汝はかつて此婦に語言し人なるかといふに然りとこたふ マノアいひけるは汝の言の

三 ごとく成ん時は其兒の養育方および之になすべき事は如何 エホバの使者マノアにいひけるはわがさきに婦に
四 言しところのことどもは婦之をつゝしむべきなり すなはち葡萄樹よりいづる者は凡て食ふべからず葡萄酒と

濃き酒を飲ずまたすべて穢たるものを食ふべからずすべてわが彼に命じたることどもを彼守るべきなり
一五 マノア、エホバの使者にいひけるは請我らをして汝を款留しめ汝のまへに山羊羔を備へしめよ エホバ

一六 の使者マノアにいひけるは汝我を款留るも我は汝の食物をくらはじまた汝燔祭をそなへんとならばエホバにこれ
一七 をそなふべしとマノアは彼がエホバの使者なるを知ざりしなり マノア、エホバの使者にいひけるは汝の名は

一八 なにぞ汝の言の效驗あらんときは我ら汝を崇ん エホバの使者之にいひけるは我が名は不思議なり汝何故に
一九 之をたづぬるやと マノア山羊羔と素祭物とをとり磬のうへにて之をエホバにさゝぐ使者すなはち不思議なる

二〇 事をなせりマノアとその妻之を視る 二〇 すなはち火燄壇より天にあがれるときエホバの使者壇の火燄のうちにあ

りて昇れりマノアと其の妻これを視をりて地にひれふせり

二一 エホバの使者そののち重ねてマノアと其の妻に現はれざりきマノアつひに彼がエホバの使者たりしを曉れ

二三 茲にマノアその妻にむかひ我ら神を視たれば必ず死ぬるならんといふに 二三 其の妻之にいひけるはエホバ

もし我らを殺さんとおもひたまはゞわれらの手より燔祭及び素祭をうけたまはざりしならんまたこれらの諸のこ

二四 とを我らに示すことをなしこたびのごとく我らに斯ることを告たまはざりしなるべしと 二四 かくて婦子を産て

二五 その名をサムソンと呼べりその子育ち行くエホバこれを恵みたまふ 二五 エホバの靈ゾラとエシタオルのあひだ

なるマハネダンにて始て感動す

第一四章

サムソン、テムナテに下り、ペリシテ人の女にてテムナテに住るひとりの婦を見 二六 歸り上りて

おのが父母に語ていひけるは我ペリシテ人の女にてテムナテに住るひとりの婦を見たりされば今之

三 をめとりてわが妻とせよと 三 その父母之にいひけるは汝ゆきて割禮を受けざるペリシテ人のうちより妻を迎ん

とするは汝が兄弟等の女のうちもしくはわがすべての民のうちに婦女無が故なるかとしかるにサムソン父にむか

四 ひ彼婦わがこゝろに適へば之をわがために娶れと言ひ 四 その父母はこの事のエホバより出しなるを知ざりき

サムソンはペリシテ人を攻んと鬻をうかゞひしなりそは其のころペリシテ人イスラエルを轄め居たればなり

五 サムソン父母とともにテムナテに下りてテムナテの葡萄園にいたるに稚き獅子咆哮りて彼に向ひしが

六 エホバの靈彼にのぞみたれば山羊羔を裂がごとくに之を裂たりしが手には何の武器も持ざりきされどサムソン

イ利九・二四 代上 口士六・二二 二六 士六・二二 八〇、二五二 ト書一五・三三 士リ創三八・一三 書ル創二一・二一、三四 三四・一六申七・三
二一・二六 結一・ハ創三三・三〇 出 二來一・三三 へ士三・一〇 母前 一八・一一 一五・一〇 三創二四・三四 三
二八 太二七六 三三・二〇 申五 ホ母前三・一九 路一 二一・六 太四・一 士一八・二二 又創三四・二 三創三四・一四 出 力書一・二〇 王上

一三・二五 王下六 二五・二〇
三三 代下二〇・ヨ士二三・一 申二八 二五 母前二一・六
一五、三三・七、四八

レ王上二〇・一 結 ツ創四五・二二 王下 ナ士一五・六
一七・二二 路一四・七 五・二二
ソ創二九・二七 ネ士一六・五
ラ士一六・一五

七 はその爲せしことを父にも母にも告ずしてありぬ サムソンつひに下りて婦とうちかたらひしが婦その心に

八 かなへり かくて日を経て後サムソンかれを娶らんとて立かへりしが身を轉して彼の獅子の屍を見るに獅子の

九 體に蜂の群と蜜とありければ すなはちその蜜を手にとりて歩みつゝ食ひ父母の許にいたりて之を與へけるに

彼ら之を食へりされど獅子の體よりその蜜を取來れることをば彼らにかたらざりき

一〇 斯て其の父下りて婦のもとに至りしかばサムソン少年の習例にしたがひてそこに饗宴をまうけたるに

二一 サムソンを見て三十人の者をつれ來りて之が伴侶とならしむ サムソンかれらにいひけるは我汝らに

ひとつの隠語をかけん汝ら七日の筵宴の内に之を解てあきらかに之を我に告なば我汝らに裏衣三十と衣三十襲を

二二 あたふべし 然どもし之をわれに告得ずば汝ら我に裏衣三十と衣三十襲を與ふべしと彼等之にいひけるは汝の

二四 隠語をかけて我らに聽しめよ サムソン之にいひけるは食ふ者より食物出で強き者より甘き物出でたりと彼ら

三日の中に之を解ことあたはざりしかば

二五 第七日にいたりてサムソンの妻にいひけるは汝の夫を説すゝめて隠語を我らに明さしめよ然せずば火をも

二六 て汝と汝の父の家を焚ん汝らはわれらの物をとらんとてわれらを招けるなるか然るにあらずやと 是において

サムソンの妻サムソンのまへに泣いていひけるは汝はわれを惡む而已われを愛せざるなり汝わが民の子孫に隠語を

かけて之をわれに説あかさずとサムソン之にいふ我これをわが父や母にも説あかさざればいかで汝に説あかさすべ

二七 けんやと 婦七日の筵宴のあひだ彼のまへに泣き居りしが第七日に至りてサムソンつひに之を彼に説あかせり

二八 其は太く強たればなり婦すなはち隠語をおのが民の子孫に明せり 是において第七日に及びて日の没るまへに

邑の人々サムソンにいひけるは何ものか蜜よりあまからん何ものか獅子より強からんとサムソン之にいひけるは
汝らわが牝犢をもて耕さざりしならばわが隠語を解得ざるなりと 茲にエホバの靈サムソンに臨みしかばサム

ソン、アシケロンに下りてかしこの者三十人を殺しその物を奪ひ彼の隠語を解し者等にその衣服を與へはげしく

怒りて其父の家に上り サムソンの妻はサムソンの友となり居たるその伴侶の妻となりぬ

第一章

日を経てのち麥秋の時にサムソン山羊羔をたづさへて妻のもとを訪ていひけるは我室に入てわが
妻に會んと然るに妻の父其の入ことをゆるさず 其父すなはちいひけるはわれまことに汝は彼の

婦を嫌ひたりと意ひしがゆるゑに彼を汝の伴侶たりし者に與へたり彼が妹は彼よりも善にあらずやねがはくは彼に

代て之を汝のものとせよ サムソン彼らにいひけるは今回はわれペリシテ人に害を加ふるとも彼らに對して罪

なかるべしと サムソンすなはち往て山犬三百をとらへ火炬をとり尾と尾をあはせてその二つの尾の間に一つ

の火炬を結ひつけ 火炬に火をつけてペリシテ人のいまだ刈ざる麥のなかにこれを放ち入れその束ね積たる

ものといまだ刈ざるものを焚き橄欖の園にまで及ぼせり ペリシテ人いひけるは是は誰の行爲なるやこたへて

言ふテムナテ人の婿サムソンなりそは彼サムソンの妻をとりて其伴侶なりし者に與へたればなりとこゝにおいて

ペリシテ人上りきたりて彼の婦とその父とを火にて焼きうしなへり サムソンかれらに言ふ汝ら斯おこなへば

我汝らに仇をむくはでは止じと すなはち脛に腿に彼らを撃て大いに之を殺せりかくてサムソンは下りてエタ

ムの巖間に居る

こゝにおいてペリシテ人上り來りてユダに陣を取りレヒに布き備へたれば ユダの人々いひけるは汝ら

イ士三・一〇、一三、ハ士一五・二、二五、ニ士一四・二〇、ホ士一四・一五、ヘ士一五・一九、ト士一四・四、リ利二六・八、書二三・一〇、士三・三一、ル創四五・二七、賽七・一三、一、ヨ約三・二九、ホ士一四・一五、チ士三・一〇、一四・六、又詩三・七、チ詩三四・六

- 何の故にわれらに攻めのほりたるやとかれらこたへけるはサムソンをしばりて彼がわれらに爲しごとくかれに爲んとてのほれるなりと 是をもてユダの人三千人エタムの巖間にくだりてサムソンにいふ汝ペリシテ人はわれらを轄るものなるを知らざるや汝などてかわれらに斯る事をなせしやサムソンかれらにいひけるは我は彼らが我に爲しごとく彼らに爲しなりと かれらまたサムソンにいひけるは我らは汝をしばりてペリシテ人の手にわたさんとて下りきたれりサムソンかれらにいひけるは汝らの自われを害すまじきことを我に誓へ 彼ら之にかたりていふいなわれらはたゞ汝を縛りいましてペリシテ人の手にわたさんのみわれらは必らず汝を殺さざるべしとすなはち二條の新しい素をもてかれをいまして巖より之を携かへれり
- サムソン、レヒに至れるときペリシテ人聲を揚てかれに近づきしが時しもエホバの靈彼にのぞみたればその腕にかゝれる素は火に焚たる麻のごとくになりて手のいましめ解はなれたり サムソンすなはち驢馬のあたらしき腮骨ひとつを見出し手をのべて之を取り其をもて一千人を殺し 而して言ふ驢馬の腮骨をもて山をきづき山をつくる驢馬の腮骨をもて我一千人を撃殺せりと かく言終りてその手より腮骨をうちすて其處をラマテレヒと名けたり 時に彼渴をおぼゆること甚だしかりしかばエホバによばはりていふ汝のしもべの手をもて汝この大なる拯をほどこしたまへるにわれ今渴きて死に割禮を受けざるもののおちいらんとすとこゝにおいて神レヒに在るくぼめる所を裂きたまひしかば水そこよりながれいでしがサムソン之を飲たれば精神舊に返りてふたゝび爽になりぬ故に其名をエンハツコレ(呼はれるものの泉)と呼ぶ是今日にいたるまでレヒに在り サムソンはペリシテ人の治世の時に二十年イスラエルをさばけり
- 第二十六章 サムソン、ガザに往きかしこにてひとりの妓を見てその處に入しに サムソンこゝに來れり

とガザ人につぐるものありければすなはち之を取り圍みよもすがら邑の門に埋伏し詰朝におよび夜の明たる時に之をころすべしといひてよもすがら靜まりかへりて居るサムソン夜半までいね夜半にいたりて興き邑の門の扉とふたつの柱に手をかけて樅もろともに之をひきぬき肩に載てヘブロンに向ひなる山の巔に負のぼれり

四 このちサムソン、ソレクの谷に居る名はデリラと言ふ婦人を愛す

五 ペリシテ人の群伯その婦のもとに上り來て之にいひけるは汝サムソンを説すゝめてそのおほいなる力は何に在るかまたわれら如何にせば之に勝て之を縛りくるしむるを得べきかを見出せ然すればわれらのおの銀千百枚づつをなんぢに與ふべし

六 こゝに

七 之をわれにつげよ

七 サムソン之にいひけるは人もし乾きしことなき七條の新しき繩をもてわれを縛るときはわれ弱くなりて別の人のごとくならんと

八 こゝに於てペリシテ人の群伯乾きしことなき七條の新しき繩を婦にもち來りければ婦之を以てサムソンをしばりしが

九 かねて室のうちに人しのび居て己とともにありたれば斯してサムソンにむかひサムソンよペリシテ人汝に及ぶと言にサムソンすなはちその索を絶りあたかも麻絲の火にあひて斷るゝがごとし斯其の力の原由知れざりき

一〇 デリラ、サムソンにいひけるは視よ汝われを欺きてわれに誑を告たり請ふ何をもてせば汝を縛ることをうるや今我に告よ

二 彼之にいひけるはもし人用ひたることなき新しき索をもてわれを縛りいましめなばわれ弱くなりて別の人のごとくならんと

二 是をもてデリラあたらしき索をとり其をもて彼を縛りしかして彼にいふサムソンよペリシテ人汝におよぶと時に室のうちに人しのび居たりしがサムソン絲のごとくにその索を腕より

イ母前二三・二六 詩 口士一四・一五 撒二
一一八・一〇・一一、二六・一九、五、
一一二・二二、三
一一二 徒九・二四 三二・二、六・二四

ハ士一四・一六
二米七・五

ホ民六・五 士一三・五 四三番七・一二 母
へ後七・二六・二七 前二六・一四・一八
ト民一四・九、四二、二二、二八・二五、

絶おとせり

二三 デリラ、サムソンにいひけるは今まで汝を欺きて我に誑をつげたるが何をもてせば汝をしはること

二四 をうるやわれに告よと彼之にいひけるは汝もしわが髪の毛七縷を機の緯線とともに織ばすなはち可しと 婦すな

はち釘をもて之をとめおきて彼にいひけるはサムソンよペリシテ人汝におよぶとサムソンすなはちその寢をさま

し織機の釘と緯線とを曳拔り

二五 婦こゝにおいてサムソンにいひけるは汝の心われに居ざるに汝いかでわれを愛すといふや汝すでに三次わ

二六 れをあざむきて汝が大なる力の何にあるかをわれに告ずと 日々にその言をもて之にせまりうながして彼の心

二七 を死るばかりに苦ませたれば 彼つひにその心をことごとく打明して之にいひけるはわが頭にはいまだかつて

剃刀を當しことあらずそはわれ母の胎を出るよりして神のナザレ人たればなりもしわれ髪をそりおとされなば

わが力われをはなれわれは弱くなりて別の人のことくならんと

二八 デリラ、サムソンがことごとく其のこゝろを明したるを見人をつかはしてペリシテ人の群伯を召ていひけ

るはサムソンことごとくその心をわれに明したれば今ひとたび上り来るべしとこゝにおいてペリシテ人の群伯か

二九 の銀を携へて婦のもとにいたる 婦おのが膝のうへにサムソンをねむらせ人をよびてその頭髮七縷をきりおと

三〇 さしめ之を苦めはじめたるにその力すでにうせさりてあり 婦こゝにおいてサムソンよペリシテ人汝におよぶ

といひければ彼睡眠をさましていひけるはわれ毎のごとく出て身を振はさんと彼はエホバのおのれをはなれたま

三二 ひしを覺らざりき 二二 ペリシテ人すなはち彼を執へ眼を抉りて之をガザにひき下り銅の鏈をもて之を繋げり

三三 かくてサムソンは囚獄のうちに磨を挽居たりしが 二二 その髪の毛剃りおとされてのち復長はじめたり

二三 茲にペリシテ人の群伯共にあつまりてその神ダゴンに大なる祭物をさへげて祝をなさんとしすなはち言ふ
二四 われらの神はわれらの敵サムソンをわれらの手に付したりと 民サムソンを見ておのれの神をほめたへて言
二五 ふわれらの神はわれらの敵たる者われらの地を荒せしものわれらを數多殺せしものをわれらの手に付したりと
二五 その心に喜びていひけるはサムソンを召てわれらのために戯技をなさしめよとて囚獄よりサムソンを召いだ
二六 せしかばサムソン之がために戯技をなせり彼等サムソンを柱の間に立しめしに サムソンおのが手をひきをる
二七 少者にいひけるはわれをはなして此家の倚て立ところの柱をさぐりて之に倚しめよと その家には男女充ち
ペリシテ人の群伯もまたみな其處に居る又屋蓋のうへには三千ばかりの男女をりてサムソンの戯技をなすを觀て
ありき

二八 時にサムソン、エホバに呼はりいひけるはあゝ主エホバよねがはくは我を記念えたまへ嗚呼神よねがはく
二九 は唯今一度我を強くしてわがふたつの眼のひとつのためにだにもペリシテ人に仇をむくいしめたまへと サム
ソンすなはちその家の倚てたつところの兩箇の中柱のひとつを右の手ひとつを左の手にかへて身をこれによせ
三〇 たりしが サムソン我はペリシテ人とともに死なんといひて力をきはめて身をかぐめたれば家はそのなかに居
る群伯とすべての民のうへに倒れたりかくサムソンが死るときに殺せしものは生けるときに殺せし者よりもおほ
三二 かりき このちサムソンの兄弟およびその父の家族ことごとく下りて之を取り携へるのほりてゾラとエシタオ
ルのあひだなる其の父マノアの墓にはうむれりサムソンがイスラエルをさばきしは二十年なりき

二一 第一章 こゝにエフライムの山の人にて名をミカとよべるものありしが その母に言けるは汝かつて

その千百枚の銀を取れしことを吾が聞ところにて詛ひて語りしが視よその銀はわが手に在り我之を取るなりと
母すなはちわが子よねがはくはエホバ汝に祝福をたまへと言ひ
けらくわれわが子のためにひとつの像を彫みひとつの像を鑄んためにその銀をわが手よりエホバに納む然ばわれ
今之を汝にかへすべしと ミカその銀を母にかへせしかば母その銀二百枚をとりて之を鑄物師にあたへてひと
つの像をきざませひとつの像を鑄させたり其像はミカの家に在り
およびテラビムを造りひとりの子を立ておのが祭司となせり
おのれの目に是とみゆることをおこなへり
此ときにはイスラエルに王なかりければ人々

七 こゝにひとりの少者ありてベテレヘムユダに於てユダの族の中にをる彼はレビ人にしてかしこに寓居るなり

八 この人居べきところをたづねてその邑ベテレヘムユダを去しが遂に旅してエフライムの山にゆきてミカの家

九 家にいたりしに ミカ之にいひけるは汝いづこより來れるやと彼之にいふ我はベテレヘムユダのレビ人なるが

一〇 居べきところをたづねに往くものなり ミカ之に言けるは汝われと偕に居りわがために父とも祭司ともなれよ

二 然ばわれ年に銀十枚および衣服食物を汝にあたへんとレビ人すなはち入しが

三 ことを肯ふ是においてその少者はかれの子の一人のごとくなりぬ ミカ、レビ人なるこの少者をたてて祭司となしたればすなはちミカの家に居る

四 ミカこゝにおいて言ふ今われ知るエホバわれに恩恵をたまはんそはこのレビ人われの祭司となればなり

當時そのころイスラエルには王わうなかりしがダン(ネ)人の支派びと其頃住むべき地わかれそのころすを求めたり是は彼らちもとイスラエルの

二 支派の中にありて其日まで未だ産業の地を得ざりしが故なり
ニ ダンの子孫すなはちゾラとエシタオルよりして
自己の族の勇者五人を遣はしその境を出て土地を窺ひ探らしむ即ち彼等に言ふ往て土地を探れと彼等エフライム
三 の山にいたりミカの家につきて其處に宿れり
三 かれらミカの家の傍にある時レビ人なる少者の聲を聞認たれば
四 身をめぐらして其處にいりて之に言ふ誰が汝を此に携きたりしや汝此處にて何をなすや此に何の用あるや
四 其
五 人かれらに言けるはミカ斯々我を待ひ我を雇ひて我その祭司となれりと
五 彼等これに言ふ請ふ神に問ひ我等が
六 往ところの途に利達あるや否を我等にしらしめよ
六 その祭司かれらに言けるは安じて往よ汝らが往ところの途
はエホバの前にあるなりと

七 是に於て五人の者往てライシにいたり其處に住る人民を視るに顧慮なく住ひをり其安穩にして安固なる
七 ことシドン人のごとし此國には政權を握りて人を煩はす者絶てあらず其シドン人と隔たること遠くまた他の人民
八 と交ることなし
八 斯て彼等ゾラとエシタオルに返りてその兄弟等にいたるに兄弟等如何なりしやと彼等に問
九 ければ
九 答て言ふ起よ彼等の所に攻のぼらん我等その地を見るに甚だ善し汝等は安んじをるなり進みいたりて
一〇 その地を取ること怠るなかれ
一〇 汝等往ば安固なる人民の所に至らんその地は堅横ともに廣し神これを汝らの
手に與へたまふなり此處には世にある物一箇も缺ることあらず
二二 是に於てダン人の族の者六百人武器を帶てゾラとエシタオルより出ゆき
二二 上りてユダのキリヤテヤリム
二三 に陣を張り是をもてその處をマハネダンと名けしがその名今日に存る是はキリヤテヤリムの後にあり
二三 彼等
其處よりエフライム山に進みミカの家に至りけるに

イ士一三・二五 一四 ト王上二二・六 ヌ士一八・二
ロ民二三・一七 書二 二士一七・一〇 へ王上二二・五 賽 二 王上二二・三〇 書二 王上二二・三七
ホ士一七・五、一八・ 三〇・一 何四・二二 王上二二・二七、二八 二士二三・二四 二 王上二二・三七
レ士一八・二

ソ母前一四・二八 一七・二二 ム士一七・四、五 三〇・三二 米七・ノ母後一七・八
ツ士一七・五 ナ士一八・一一 ウ伯二一・五、二九・一六 オ士一八・七、一〇申
ネ創四三・二七 母前 ラ士一八・二、一四 九、四〇・四 篇 井士一七・一〇 三三・二二

ク書一九・四七

一四 夫のライシの國を窺ひに往たりし五人の者その兄弟等に告て言けるは是等の家にはエポデ、テラビムおよび彫める像と鑄たる像あるを汝等知や然ば汝ら今その爲べきことを考へよと 乃ち其方に身をめぐらして夫のレビ人の少者の家なるミカの家に至りてその安否を問けるが 武器を帶たる六百人のダンの子孫は門の入口に立ち 夫の土地を窺ひに往たりし五人の者上りて其處にいりその彫める像とエポデとテラビムおよび鑄たる像を取けるが祭司は武器を帶たる六百人の者ととも門の入口に立ゐたり 此人々ミカの家にいりて其彫める像とエポデとテラビムと鑄たる像とを取しかば祭司かれらに汝ら何をなすやと言ふに 彼等これに言けるは汝黙せよ汝手を口にあてゝ我らとともに來り我らの父とも祭司ともなれよかし一人の家の祭司たるとイスラエルの一の支派一の族の祭司たるとは何か好や 祭司すなはち心に悦びてエポデとテラビムと彫める像とを取て民の中に入る

二一 斯てかれら身をめぐらしその子女と家畜と財寶を前にたてゝ進みしが ミカの家を遙かに離れし時ミカの家に近きところの家の人々呼はり集てダンの子孫に追ひつき ダンの子孫を呼たれば彼等回顧てミカに言ふ汝何事ありて集りしや かれら言けるは汝らはわが造れる神々および祭司を奪ひさりたれば我尙何かあらん然るに汝等何ぞ我にむかひて何事ぞやと言や ダンの子孫かれに言けるは汝の聲を我らの中に聞えしむるなかれ 恐くは心の荒き人々汝に撃かゝるありて汝おのれの生命と家族の生命とを失ふにいたらんと 而してダンの子孫進みゆきけるがミカは彼らが己よりも強きを見て身をめぐらして家に返れり

二七 彼等ミカが造りし者とその有し祭司をとりてライシにおもむき平穩にして安樂なる民の所にいたり刃を

二八 もて之を撃ち火をもてその邑を燬たりしが 其シドンと隔たること遠きが上に他の人民と交際ざりしによりて
二九 之を救ふ者なかりきその邑はベテレホブの邊の谷にあり彼ら邑を建なほして其處に住み イスラエルの生たる
三〇 その先祖ダンの名にしたがひて其邑の名をダンと名けたりその邑の名は本はライシなりき 斯てダンの子孫そ
の雕める像を安置りモーセの子なるゲルシヨムの子ヨナタンとその子孫ダンの支派の祭司となりて國の奪はるゝ
時にまでおよべり 神の家のシロにありし間恒に彼等はミカが造りしかの雕める像を安置おきぬ

第一章

一 其頃イスラエルに王なかりし時にあたりてエフライムの山の奥に一人のレビ人寄寓をりベテレヘ
二 ムユダより一人の婦人を取りて妾となしたるに 二 その妾彼に背きて姦淫を爲し去てベテレヘムユ
三 ダなるその父の家にかへり其所に四月といふ日をおくれり 是に於てその夫彼をなだめて携かへらんとてその
僕と二頭の驢馬をしたがへ起てかれの後をしたひゆきければその父の家之を導きいたりしに女の父これを見て
四 之に遇ことを悦こべり 而してその女の父なる外舅彼をひきとめたれば則ち三日これと共に居り皆食飲して
五 其所に宿りしが 四日におよびて朝早く起あがり彼たちて去んとしければ女の父その婿に言ふ少許の食物をも
六 て汝の心を強くして然る後に去れよと 二人すなはち坐りて共に食飲しけるが女の父その人にいひけるは請ふ
七 幸に今一夜を明し汝の心を樂ましめよと 其人起て去んとしけるに外舅これを強たれば遂に復其所に宿り
八 五日におよびて朝はやく起いでて去んとしたるに女の父これに言けるは請ふ汝の心を強くせよと是をもて日の
九 戻るまでとゞまりて共に食をなしけるが 其人つひに妾および僕とともに去んとて起あがりければ女の父彼に
言ふ視よ今は日暮なんとす請ふ今一夜を明されよ視よ日戻たり汝此にやどりて汝の心をたのしませ明日蚤く起て

イ士一八・七 母後 二創一四・一四 士 二〇 二九・三〇、一五・ 二九・三〇、一五・ 二八、二二・二二 士 一七・七
口民一三・二二 母後 二創一四・一四 士 二〇 二九・三〇、一五・ 二九・三〇、一五・ 二八、二二・二二 士 一七・七
一〇・六 二〇・二 王上一二 ホ士一三・一 母前四 へ書一八・一 士二九 一、二二・二五 又創一八・五

ル書一八・二八	ワ書一八・二八	一三二	・三二・二〇・一八	ツ創四三・二三	士六	ナ創二四・三二、四三	・五	ウ申一三・一三
テ書一五・八、六三	カ書一八・二五	タ詩一〇四・二三	母前一・三、七	・二三	・二四	ム創一九・四、士二〇	・五何九・九、一〇	
一・二一 母後五・六	ヨ太二五・四三	レ書一八・一 士一八	ソ士一九・一五	ネ創一九・二	ラ創一八・四 約一三			
來								

出いでたなんぢちい汝なんぢの家いにいたれれよと

然るに其人止宿することを肯はずして起て去りエブスの對面に至れり是はエルサレムなり鞍おける二の驢馬

彼^{かれ}とともにあり妾^{めかけ}も彼^{かれ}ともなりき

二 彼^{かれ}らエプスの近傍^{ほとり}にゐる時^{とき}日はや没^いんどしければ僕^{しもべ}その主人^{しほじん}にいひける

は請ふ來れ我等身をめぐらしてエブス人の此邑にいりて其所に宿らんと
三
その主人これに言けるは我等は彼所

に身^みをめぐらしてイスラエルの子孫^{ひとぐ}の邑^{まち}ならざる外國^{よそくに}の人の邑^{ひとまち}にいるべからずギベア^(ワ)に進みゆかんとすなは

ちその僕しもべにいひけるは來きたれ我われらギベアかラマ(カ)か是等これらの處ところの一ひとに就つて止宿とどまつんと
皆みなすゝみ往いきけるがベニヤミン

のギベアの近邊ほとりにて日暮ひくれたれば
ギベアにゆきて宿しゆくらんとて其所そのところに身をめぐらし入て邑いの衢みちに坐しけるに誰も

(三) 彼を家に接て宿らしむる者なかりき

時に一人の老人日暮に田野の働作をやめて歸りきたる此人はエフライム山の者にしてギベアに寄寓れるな

り但し此處の人はベニヤミン人なり
彼目をあげて旅人の邑の衢にをるを見たり老人すなはちいひけるは汝は

何所にゆくなるや何所より來れるやと
その人これにいひけるは我らはベテレヘムユダよりエフライム山の奥

におもむく者なり我は彼所の者にて既にベテレヘムユダにゆき今エホバの室に詣らんとするなるか誰もわれを家

に接ものあらず
然ど驢馬の藁も飼藁もあり又我と汝の婢および僕等とともなる少者の用ふべき食物も酒も在

て何も事缺るところなし 老人いひけるは願くは汝安かれ沙が需むる者は我そなへん唯(未)襁に宿るなかと

かれをその家に携れ驢馬に飼ふ彼らすなはち足をあらひて食飲せしか
(ナ)
三三 こころ たのし とき まち ひとく よこしま もの いへ と うち いへ あまじ

その心を樂ませる時にあたりて邑(ム)の人々の牙(ウ)なる者その家をとりにかこみ戸をたたいてきて家の主人たる

二三 老人に言ふ汝の家に来たる人をひき出せ我らこれを犯さんと 是に於て家の主人なる人かれらの所にいでゆきてこれに言けるは否わが兄弟よ惡をなす勿れ此人すでにわが家にいられたればこの愚なる事をなすなかれ 我

二四 が處女なる女と此人の妾とあるにより我これを今つれいだすべければ汝らかれらを辱しめ汝等の好むところをこれに爲せ唯この人には斯る愚なる事を爲すなかれと 然るにその人々これを聽いれざるにより其人その妾をとりてこれを彼らの所にいだしやりければすなはちこれを犯して朝にいたるまで終夜これを辱しめ日のいづる頃にいたりて釋てり 是をもて婦黎明にきたりてその夫のをる彼人の家の門に仆れ夜のあくるまで其處に臥をる

二五 二六 二七 二八 二九 三〇

その主朝におよびておきいで家の戸をひらきて出去んとせしがその妾の婦の家の門にたふれをりて手を闕の上におくを見ければ これにむかひ起よ我ら出往んと言たれども何の答もあらざりき是によりてその人これを驢馬にのせたちて己の所におもむきしが 家にいたるにおよびて刀をとり其妾を執へて骨ぐるみこれを十二分にたちわりて之をイスラエルの四方の境におくりければ 之を見る者皆いふイスラエルの子孫がエジプトの地より出のぼりし日より今日にいたるまで斯のごとき事は行はれしことなく見えしことなし思をめぐらし相議りて言ふことをせよ

カ士一九・一五
ヨ士一九・二二
タ士一九・二五、二六
レ士一九・二九
ソ番七・二五
ツ番一九・三〇
ネ申一三・一四
二二・一三、一六
ナ申一三・二三
書 一九・二二
ラ申一七・二二
士ム士三・一五
代上 一二・二

五 れし婦の夫なるレビの人とたへていふ我わが妾とともにベニヤミンのギベアに宿らんとて往たるに 五 ギベアの
人起りたちて我をせめ夜の間に我がをる家を取りかこみて我を殺さんと企て遂にわが妾を辱しめてこれを死し
めたれば 六 我わが妾をとらへてこれをたちわり是をイスラエルの産業なる全地に遣れり是は彼らイスラエルに
七 おいて淫事をなし愚なる事をなしたればなり 七 汝等は皆イスラエルの子孫なり今汝らの意見と思考をのべよ
八 民みな一人のごとくに起ていひけるは我らは誰もおのれの天幕にゆかずまた誰もおのれの家におもむかじ
九 我らがギベアになさんところの事は是なりすなはち闇にしたがひて之を攻ん 一〇 我らイスラエルの諸の支派の
一〇 中に於て百人より十人千人より百人 萬人より千人を取りて民の糧食を執せ之をしてベニヤミンのギベアに
二 いたり彼らがイスラエルにおこなひたるその愚なる事にしたがひて事をなさしむべしと 二 斯イスラエルの人々
皆あつまりて此邑を攻んとせしが其相結べること一人のごとなりき
三 イスラエルの諸の支派遍く人をベニヤミンの支派の中に遣はして言しめけるは汝らの中に此惡事のおこな
はれしは何事ぞや 三 然ばギベアにをるかの邪なる人々をわたせ我らこれを誅して惡をイスラエルに絶べしと
四 然るにベニヤミンの子孫はその兄弟なるイスラエルの子孫の言を聴いれざりき 四 却てベニヤミンの子孫は邑々
五 よりギベアにあつまりて出てイスラエルの子孫と戦はんとす 五 その時邑々より出たるベニヤミンの子孫を數ふ
六 るに劍をぬくところの人二萬六千あり外にまたギベアの居民ありて之をかぞふるに精兵七百人ありき 六 この諸
七 の民の中に左手利の精兵七百人あり皆能く投石器をもて石を投るに毫末もたがふことなし
八 イスラエルの人を數ふるにベニヤミンを除きて劍をぬくところの者四十萬人ありき是みな軍人なり 八 爰

にイスラエルの子孫起あがりてベテルにのぼり神に問て我等の中孰か最初にのぼりてベニヤミンの子孫と戦ふべきやと言ふにエホバ、ユダ最初にと言たまふ

一九 イスラエルの子孫すなはち朝おきてギベアにむかひて陣をとりけるが 二〇 イスラエルの人々ベニヤミンと戦はんとて出でゆきイスラエルの人々行伍をたてゝギベアにて彼らと戦はんとしければ 二一 ベニヤミンの子孫ギベアより進みいでて其日イスラエル人二萬二千を地に撃仆せり 然るにイスラエルの人々みづから奮ひ 二三 その初の日に行伍をたてし所にまた行伍をたてたり 而してイスラエルの子孫上りゆきてエホバの前に夕暮まで哭きエホバに問て言ふ我復進みよりて吾兄弟なるベニヤミンの子孫とたゝかふべきやとエホバ彼に攻のぼれと言たまへり

二四 是に於てイスラエルの子孫次の日またベニヤミンの子孫の所に攻よするに 二五 ベニヤミンまた次の日ギベアより進みて之にいであひ再びイスラエルの子孫一萬八千人を地に撃仆せり是みな劍をぬくところの者なりき 二六 斯在しかばイスラエルの子孫と民みな上りてベテルにいたりて哭き其處にてエホバの前に坐りその日の夕暮まで食を斷ち燔祭と酬恩祭をエホバの前に獻げ 二七 而してイスラエルの子孫エホバにとへり(その頃は神の契約の櫃彼處にありて 二八 アロンの子エレアザルの子なるビネハス當時これに事へたり)即ち言けるは我またも出てわが兄弟なるベニヤミンの子孫とたゝかふべきや或は息べきやエホバ言たまふ上れよ明日はわれ汝の手にかれらを付すべしと

二九 イスラエル是に於てギベアの周圍に伏兵を置き 三〇 而してイスラエルの子孫三日目にまたベニヤミンの

イ士二〇・二三・二六 八創四九・二七 へ士二〇・一八 十書二四・三三
口民二七・二一 士二 二士二〇・二六・二七 ト書一八・一 母前四 リ申一〇・八、一八・五
ホ士二〇・二一 二、三四 又書八・四

三二 子孫の所に攻のほり前のごとくにギベアにむかひて行伍をたてたれば 三二 ベニヤミンの子孫民に出あひしが遂に
邑より誘出されたり彼等始は民を撃ち大路にて前のごとくイスラエルの人三十人許を殺せりその大路は一筋は
三三 ベテルにいたり一筋は野のギベアに至る 三三 ベニヤミンの子孫すなはち言ふ彼らは初のごとく我らに撃破らると
三三 然るにイスラエル人は云ふ我等逃て彼らを邑より大路に誘き出さんと 三三 イスラエルの人々みなその所を起て
三三 去りバアルタマルに行伍をたてたり而して伏兵その處より即ちギベアの野原より起れり 三四 イスラエルの全軍の
中より選抜たる兵一萬來りてギベアを襲ひ其戰鬪はげしかりしがベニヤミン人は舊害の己にのぞむを知ざりき
三五 エホバ、イスラエルのまへにベニヤミンを擊敗りたまひしかばイスラエルの子孫その日ベニヤミン人二萬五
千一百人を殺せり是みな劍をぬくところの者なり
三六 ベニヤミンの子孫すなはち己の擊敗らるゝを見たり偕イスラエルの人々そのギベアにむかひて設たるとこ
ろの伏兵を恃てベニヤミン人を避て退きけるが 三六 伏兵急ぎてギベアに突いり伏兵進みて刃をもて邑を盡く撃り
三八 イスラエルの人々とその伏兵との間に定めたる合圖は邑より大なる黒烟をあげんとの事なりき 三九 イスラエ
ルの人々戰陣より引き退ぞくベニヤミン初が程はイスラエルの人々を撃て三十人許を殺し乃ち言ふ彼等はまこ
四〇 とに最初の戰のごとく我等に撃やぶらると 四〇 然るに火焰烟の柱なして邑より上りはじめしかばベニヤミン人後
四一 を見かへりしに邑は皆烟となりて空にのぼる 四一 時にイスラエルの人々ふりかへりしかばベニヤミンの人々舊害
四二 のおのれに迫るを見て狼狽へ 四二 イスラエルの人々の前より身をめぐらして野の途におもむきけるが戰鬪これに
四三 追せまりて遂にその邑々よりいでたる者どもその中に戰死す 四三 イスラエルの人すなはちベニヤミン人を取りま

きて之を追うち容易くこれを踏たふして東の方ギベアの對面にまでおよべり 四四
ベニヤミンの仆るゝ者一萬八千人
人はみな勇士なり 四五
茲に彼等身をめぐらして野の方ににげリンモンの磐にいたれりイスラエルの人大路にて
彼等五千人を伐とり尙もこれを追うちてギドムにいたりその二千人を殺せり 四六
是をもて其日ベニヤミンの仆れし者は劍をぬくところの人あはせて一萬五千なりき是みな勇士なり 四七
但六百人の者身をめぐらして野の方に
のがれリンモンの磐にいたりて四月があひだリンモンの磐にをる 四八
是に於てイスラエルの人々また身をかはしてベニヤミンの子孫をせめ刃をもて邑の人より畜にいたるまで凡て目にあたる者を撃ち亦その至るところの邑々に火をかけたり

第二章

一 イスラエルの人々曾てミヅパにて誓ひ曰けるは我等の中一人もその女をベニヤミンの妻にあたふる者あるべからずと 二
茲に民ベテルにいたり彼處にて夕暮まで神の前に坐り聲を放ちて痛く哭き
三 言けるはイスラエルの神エホバよなんぞイスラエルに斯ること起り今日イスラエルに一の支派の缺るにいたりしやと 四
而して翌日民蚤に起て其處に壇を築き燔祭と酬恩祭をさゝげたり 五
茲にイスラエルの子孫いひけるはイスラエルの支派の中に誰か會衆とともに上りてエホバにいたらざる者あらんと其はかれらミヅバに來りてエホバにいたらざる者の事につきて大なる誓をたてゝ其人をばかならず死しむべしと言たればなり 六
イスラエルの子孫すなはち其兄弟ベニヤミンの事を憫然におもひて言ふ今日イスラエルに一の支派絶ゆ 七
我等エホバをさして我らの女をかれらの妻にあたへじと誓ひたれば彼の遺る者等に妻をめとらしめんには如何にすべきや 八
又言ふイスラエルの支派の中孰の者がミヅパにのぼりてエホバにいたらざると而して視るにヤベシギレア

サ士二一・五、五・二 ヌ書一八・一
三 傳別一・七 ル士二〇・四七
リ民三一・一七 ナ申二〇・一〇
ワ士二一・六 ヨ出一五・二〇 士 一三
カ士二一・一、一一・一 母前
三五 一八・六 耶三一・一

九 デよりは一人も陣營にきたり集會に臨める者なし 即ち民をかぞふるにヤベシギレアデの居民は一人も其處に

一〇 をらざりき 是に於て會衆勇士一萬二千を彼處に遣し之に命じて言ふ往て刃をもてヤベシギレアデの居民を撃

二 婦女兒女をも餘すなかれ 汝ら斯おこなふべし即ち汝等男人および男と寝たる婦人をば悉く滅し盡すべし

三 と 彼等ヤベシギレアデの居民の中にて四百人の若き處女を獲たり是は未だ男と寝て男しりしことあらざる者

なり彼らすなはち之をシロの陣營に曳きたる是はカナンの地にあり

斯て全會衆人をやりてリンモンの磐にをるベニヤミン人と語はしめ和睦をこれに宣しめたれば

二五 之にあたへけるが尙足ざりき エホバ、イスラエルの支派の中に缺を生ぜしめたまひしに因て民ベニヤミンの

事を憫然におもへり

一六 會衆の長老等いひけるはベニヤミンの婦女絶たれば彼の遺れる者等に妻をめとらせんには如何すべきや

一七 又言けるはベニヤミンの中の逃れたる者等に産業あらしめん然らばイスラエルに一の支派の消ることなかる

一八 べし 然ながら我等は我等の女子をかかれらの妻にあたふべからず其はイスラエルの子孫誓をなしベニヤミンに

一九 妻を與ふる者は詛はれんと言たればなりと 而して言ふ歳々シロにエホバの祭ありと其處はベテルの北にあた

二〇 りてベテルよりシケムにのぼるところの大路の東レバナの南にあり 是に於てかれらベニヤミンの子孫に命じ

二一 て言ふ汝らゆきて葡萄園に伏して窺ひ 若シロの女等舞をどらんと出きたらば葡萄園より出でシロの女の中よ

二三 り各人妻を執てベニヤミンの地に往け 若その父あるひは兄弟來りて我らに懇へなば我らこれに言ふべし請ふ

幸さいはひにかれらを我われらに取とせよ我等戦争われらいくさの時に皆みなことごとくその妻つまをとりしにあらざればなり汝等なんぢら今かれらに與あへ
三 しにあらざれば汝等なんぢらは罪つみなしと 二三 ベニヤミンの子孫ひとぐすなはちかく行おこなひその踊をどれる者等ものどもを執とらへてその中うちより已おのれ
二四 の數かずにしたがひて妻つまを取り往ゆきてその地ちにかへり邑々まちを建たてなほして其處そこに住すまり 二四 斯かくてイスラエルの子孫ひとぐその時ときに
其處そこを去さりて各人おのくその支派わかれに往ゆきその族やからにいたれり即すなはち其處そこより出いでておのおのその地ちにいたりぬ
二五 當時そのころはイスラエルに王わうなかりしかば各人おのくその目めに善よしと見みるところを爲なせり
二五 當時そのころはイスラエルに王わうなかりしかば各人おのくその目めに善よしと見みるところを爲なせり

士 師 記 を は り